

## 2004 年度 文学部自己点検・評価報告書

### I 大学・学部における主要点検・評価項目

#### 3 学士課程の教育内容・方法等

##### 評価目標

文学部は、学校教育法第 52 条の趣旨に基づき、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的および応用的な能力を身につけることを目的としている。すなわち、専門的な学芸を身につけた真の意味での教養人を育成することを目的とするが、とくに文学部であることから、異文化を理解するための外国語学習にも力を入れている。そして、本学の建学の精神に基づき、教育、文化、平和に貢献する人材の育成を目標としている。

##### 具体的方法

文学部は、英文学科、社会学科、人文学科、日本語日本文学科、外国語学科の 5 学科に分かれ、そのうち外国語学科は中国語専攻、ロシア語専攻の 2 専攻に分かれている。上記の目標はそれぞれの学科・専攻の特色を生かした方法によって実現することをめざすこととなる。

したがって以下では、学科および専攻ごとに、「評価目標」および「具体的方法」について述べるとともに、項目にそって自己点検評価を行うこととする。

## 文学部英文学科

### I 大学・学部における主要点検・評価項目

#### 3 学士課程の教育内容・方法等

##### 評価目標

英語運用能力の向上をめざすとともに、幅広い教養を身につけ、本学の建学の精神の実現をめざす。

##### 具体的方法

学生の習熟度に応じた学習の仕方をするすることで、会話能力・聴解能力を向上させる。さらには通訳、翻訳の能力を身につけさせる。また、国際情勢の理解を深める授業内容を充実させる。

## (1) 教育課程等

(学部・学科等の教育課程)

(A群1) 学部・学科等の教育課程と各学部・学科等の理念・目的並びに学校教育法第52条、大学設置基準第19条との関連

### 1. 「現状の説明」

英文学科の理念・目的は、建学の精神（特に第2の指針「新しき文化建設の揺籃たれ」）に則り、英語・英米文学及びその文化的側面の研究を通じて、国際的・歴史的な視野と感性をもつ、有為の人材を育成する。その遂行にあたり次の基本方針を掲げている。

- (1) 比較的早い年次において言語（個別対象言語としては英語だが、母語としての日本語、ないし言語一般への視点も含めて）の本質の理解とその運用の習熟とをはかる。
- (2) 学生の適性ないし主体性を重視・尊重し、学習内容に柔軟な選択余地を残す。
- (3) 真に国際的レベルで活躍できる能力と見識を養うため、広い分野に互る知識を習得し関心を高める。

なお以下の自己点検・評価は2003年度以降のカリキュラムに基づくが、必要に応じて1999年度カリキュラムに基づいて述べる。

英文学科の教育課程は全体として専門科目の比重が大きく、また必修より選択科目の比重が大きくなっている。これは99年度に導入したセメスター制の特徴で、学生が自分の興味（勉強したい分野）に合わせて自由に科目を選択できるようにした結果である。

「学校教育法第52条」の要求する「専門教育」について言えば、本学科は厳密にコース制をとってはいないものの、専門科目が便宜的に①「英米文学関係」②「英語学関係」③「英語コミュニケーション関係」のいずれかの分野に含められるようにバランスよく配分されている。すなわち、①には「英米文学講読」「英米文学研究」「英米文学概論」「英米文学史」等が、②には「英文法研究」「英語音声学」「英語学概論」「英語史」「コーパス英語学」「言語学」等が、③には「英会話」「英語表現演習」「現代英語演習」等がある。これらのうち、基礎的科目（早期に習熟すべき科目）として、「英語表現演習」「英会話」「現代英語演習」「英米文学講読」等が1、2年次に配当されている。

「一般教育科目」や「外国語科目」の学習については、「共通科目」がその役割を果たしている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

「英語A」（1年次）「英語B」（2年次）は30人程度のクラスサイズで必修とし、英語についての文法、読解力、作文応用力を育成している（こうした授業は担任教員と外国人専任教員が担当するようにしている）。「英語表現演習A・B」（1、2年次）「英米文学講読A」（1年次）も30人程度のクラスサイズで必修であり、「英会話」も少人数のクラスで行われ、1年次が必修である。また、「英文法研究」「英語学概論」「英語音声学」は選択科目であるが、履修を強く勧めている。なお、英語以外の外国語も4単位を必修にしている。他の外国語の学習は英語学習のよき刺激となっている。

また、3分野（「英米文学関係」「英語学関係」「英語コミュニケーション関係」）の

科目の最低限の科目数（4年間で12科目22単位）を必修としている。それ以外（52単位）は選択にし、学生に自由に選ばせている。さらに共通科目の中から自由に選択し、教養を深めるように指導している。

これらに関してほぼ期待通りの成果が上がっている。しかし、次の3点を指摘したい。第1に、学生間の英語運用能力の差を打開する方策を検討する。第2に、共通科目について、英文学科の学生としてどのような教養を身につけるべきかを具体的に示す必要がある。第3に、英文学科として「人類の平和を守るためのフォートレスたれ」という本学の第3の建学精神を押し進めるために必要な科目を検討する必要がある。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

- ①学生間の英語運用能力の差を解消するために、ワールドランゲージセンターが設置する英文学科専用の科目（習熟度別クラス編成）を履修するように促す。また、学生個人の習熟度に応じた個別学習をいかに綿密に体系的に提供できるか検討する。
- ②英文学科として、共通科目の履修のモデルを具体的にいくつか提示する。
- ③本学の第3の建学精神を押し進めるために、特殊講義」や「現代英語演習」等の科目のなかで学生に国際情勢の理解を深化させ、通訳や翻訳の技能を身につける機会をもうける。

## （A群2）学部・学科等の理念・目的や教育目標との対応関係における、学士課程としてのカリキュラムの体系性

### 1. 「現状の説明」

学科としては、基本方針の目標達成のため、「専門科目 74単位」「共通科目 30単位」「自由選択科目（専門科目または共通科目で、余分に履修したもの、および教職課程科目等） 20単位」を履修するカリキュラムになっている。「専門科目」のうち、必修科目は22単位で、1～2年次に習熟すべき科目（「英米文学講読AB」「英語表現演習AB」「英会話A」）と3～4年次に履修するゼミである。選択科目についても、基礎的なものは1～2年次に履修（「英米文学史」「英語史」「英語音声学」「現代英語演習A」「コーパス英語学」等）するようにし、応用的なものは3～4年次に履修するようになっている。「共通科目」は1～4年次に、興味のあるものを履修（英文学科の場合、語学関係12単位を除いた18単位分を自由に選択）することができる。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

“専門”能力の育成と学生の自主的“選択”を重視した「専門」「共通」「自由選択」の科目の配分により、学科の基本的目標はおおむね達成できている。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

英文学科として、共通科目の履修のモデルを具体的にいくつか提示する。

## （A群3）教育課程における基礎教育、倫理性を培う教育の位置づけ

### 1. 「現状の説明」

英文学科においては、担任教員が少人数クラスの「英語A・B」を教えることで、高校までの英語の総復習をし、さらに異文化理解に踏み込むなど、基礎教育を行っている。その

他、文法、作文、読解、会話の基礎を固めるための科目を必修にしている（「英語表現演習A・B」「英米文学講読A」「英会話A」）。「(英語以外の)外国語」も4単位が選択必修である。

「(一般)教養科目」における基礎教育については、学生が「共通科目」の中から、自由に自分に不足している分野を学習することになっている。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

「英語」面では、現状のカリキュラムにより、十分に基礎教育もでき、効果は上がっていると思う。「(英語以外の)外国語」4単位選択必修というのも、「英語」を別の言語から客観的に見ることができるようになり、「英語」学習の助けとなっている。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

本学の第1の建学精神「人間教育の最高学府たれ」を押し進めるために、少人数クラス編成、担任制度、ゼミ制度をさらに充実させ、人間性豊かな教育をめざし有為な人材の輩出に力を入れる。

## (B群1)「専攻に係る専門の学芸」を教授するための専門教育的授業科目とその学部・学科等の理念・目的、学問の体系性並びに学校教育法第52条との適合性

### 1. 「現状の説明」

英文学科として「専門教育」の目標としている3分野（「英米文学関係」「英語学関係」「英語コミュニケーション関係」）について、1～2年次にその基礎を、3～4年次に応用展開にあたるものをそれぞれバランスよく提供している。第52条の要求している「道徳的」能力の育成についても、文学作品などにより効果を上げようと努力している。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

学科の「専門」の3分野をバランスよく教授しており、また比較的少人数の教育とあいまって、第52条の期待する「知的、道徳的及び応用的能力」を育成できていると思う。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

さらに「道徳的」能力を育成するには、必修である「英語A・B」（共通科目であるが）で、平和・人権・哲学を扱った教科書を用いることなどが考えられる。

## (B群2)一般教養的授業科目の編成における「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養」するための配慮の適切性

### 1. 「現状の説明」

学生が「共通科目」の中から、外国語科目（必修+選択必修12単位）以外に自分の関心のある一般教育科目を自由に18単位分選び、履修できる。また、「自由選択科目」といって、「専門科目」「共通科目」の中から必要以上に履修したもののうちで、20単位分は卒業単位として認められる。全部「共通科目」から履修することも可能であり、一般教養をさらに深く身につける機会を提供できている。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

授業科目の編成において、一般教養を身につける機会が十分に与えられている。しかし学生の選択には幾分偏りが見られる傾向にあり、何らかの対策を講じる必要がある。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

英文学科として共通科目の履修モデルをいくつか提示し、学生に「幅広く深い教養」「総合的な判断力」を培うように促す。

### (B群3) 外国語科目の編成における学部・学科等の理念・目的の実現への配慮と「国際化等の進展に適切に対応するため、外国語能力の育成」のための措置の適切性

#### 1. 「現状の説明」

英文学科においては、「外国語科目」は、「英語A・B」(必修8単位)と「(英語以外の)外国語」(選択必修4単位)である。学科の目標のうちの(a)「1～2年次に言語の本質の理解とその運用の習熟をはかる」に寄与することが期待されている。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

「英語A・B」は英語の基礎を確認し、教材に応じて、異文化理解をはかり、国際的視野を養う、総合的科目となっている。半分の4単位は、英文学科においては、外国人教員が担当し、聴解力、表現力の基礎も確実なものにしている。また「(英語以外の)外国語」を選択必修にすることで、別の言語から英語を見直すことができ、英語学習による刺激となっている。問題点としては学生間に英語の会話能力、聴解能力は習熟度差があるように思われるので、この現状を踏まえた授業を工夫しなくてはならない。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

学生間の英語運用能力の差を解消するために、ワールドランゲージセンターが設置する英文学科専用の科目(習熟度別クラス編成)を履修するように促す。また、学生個人の習熟度に応じた個別学習をいかに綿密に体系的に提供できるか検討する。

### (B群4) 教育課程の開設授業科目、卒業所要総単位に占める専門教育的授業科目・一般教養的授業科目・外国語科目等の量的配分とその適切性、妥当性

#### 1. 「現状の説明」

英文学科の卒業所要単位は124単位で、「専門科目74単位(88科目を提供)」「共通科目(外国語以外のもの)18単位(約180科目を提供)」「共通科目・外国語12単位(「英語AB」必修8単位、英語以外は約75科目の中から4単位選択必修)」および「自由選択科目20単位(上記「専門科目」と「共通科目」の科目から余分に履修したものをこの単位に入れることができる。その他、他学部専門科目や教職科目も入れてよい)」の合計となる。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

専門科目の科目数が多いのは、学生の自主的選択を促すうえで自由の幅が大きいといえ、よいことではあるが、選択する上で戸惑うこともある。また、とくに、共通科目の場合、

自分の苦手なものを避け、本来、学科の目的であるバランスのとれた「教養教育」とならないことがあるという点があげられる。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

授業科目選択のためのガイドラインを充実させる必要がある。

## (B群5) 基礎教育と教養教育の実施・運営のための責任体制の確立とその実践

### 1. 「現状の説明」

英文学科生の「英語」の基礎教育については、担任教員が責任をもって、少人数クラスの「英語A・B」(共通科目)を教えている。さらに基礎を固めるために、「英語表現演習A・B」(1、2年次必修)「英米文学講読A」(1年次必修)「英会話」(1年次必修)「現代英語演習」「英文法研究」等の授業がおこなわれている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

担任教員による基礎教育はおおむね成功している。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

さらに教育効果を上げるために、1、2年次に基礎ゼミ制度を導入できるかどうか検討する。

## (カリキュラムにおける高・大の接続)

## (A群4) 学生が後期中等教育から高等教育へ円滑に移行するために必要な導入教育の実施状況

### 1. 「現状の説明」

「英語」教育については、1～2年次の「英語A・B」(8単位必修)「英語表現演習A・B」(8単位必修)「英会話A」(1年次・2単位必修)「英米文学講読A」(4単位必修)「英文法研究」「現代英語演習」等がその役割を果たしている。「英語A・B」は高校までの英語の総復習プラス応用であり、それ以外の5科目はそれぞれ、“作文力”“会話力”“読解力”“文法”プラス応用となっている。その他の「一般教養」については、「共通科目」を18単位分、自由に選択履修することで、後期中等教育との円滑な移行を意図している。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

「専門」である「英語」教育については、目的を達成している。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

英文学科として、共通科目の履修のモデルを具体的にいくつか提示する。

## (履修科目の区分)

## (B群7) カリキュラム編成における、必修・選択の量的配分の適切性、妥当性

### 1. 「現状の説明」

「共通科目」（言語系科目必修 8 単位、言語系科目選択必修 4 単位、言語系科目以外の科目選択必修 12 単位、選択 6 単位）小計 30 単位、「専門科目」（必修 22 単位、選択 52 単位）小計 74 単位、「自由選択科目」（20 単位）。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

現行カリキュラムでは、「専門科目」に関し、必修を 30 単位から 22 単位に減らして学生の履修の自由度を高めた。必修として残したのは、基本中の基本である読解・作文・聴解・発話の科目、およびゼミである。「卒業研究」は発展的に解消し、新たに選択科目に「英語論文」を設定した。また、4 年次のみ配当科目を見直し、ゼミと「英語論文」以外は 3・4 年次配当に統一し、カリキュラムのスリム化を進めた。「共通科目」では、必修は言語系科目として英語であり、選択必修については言語系科目として英語以外の外国語を 1 言語選び、言語系科目以外の科目を選ぶというように 2 つのカテゴリーに分け、言語に対して意識を高めるとともに、言語以外のさまざまな教養についても注目させる。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

新科目の「英語論文」はカリキュラム上 4 年次後期の履修となっているが、英語で論文を書くためにはさまざまな準備や時間が必要であるため、当該学生の 3 年次開始と同時に履修法も含め指導を徹底する。

### (授業形態と単位の関係)

#### (A 群 5) 各授業科目の特徴・内容や履修形態との関係における、その各々の授業科目の単位計算方法の妥当性

##### 1. 「現状の説明」

旧カリキュラム(2002年度入学生まで)：セメスター制のもとで、単位はすべて、通年の授業でも半期ごとに、講義形式のものは2単位、演習形式のものは1単位が履修学生に与えられてきた。新カリキュラム(2003年度入学生から)：専門科目について、選択科目の「英語論文」が4単位、「英会話」が1単位で、そのほかはすべて2単位である。

##### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

「英語表現演習」と「現代英語演習」は、かなりの量の予習・復習が要求されるため、両科目とも 2 単位科目になることが実現した。単位数を増やすことで、学生もやりがいが増したのではないかと思われる。また、履修科目数が多少なりとも削減されることから自主的学習にも余裕ができたのではないかと考える。

旧カリキュラムの「卒業研究」は 8 単位で 2005 年度まで継続する。新カリキュラムの「英語論文」は 4 単位である。システムの都合上 4 年次後期での履修となっているが、単純に 1 セメスターにおさまらないものであるため、2 単位ではなく 4 単位とした。

##### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

基本的な英語力（読解・作文・聴解・発話）をつける前半 2 年間の必修科目と、専門的な研究の場であるゼミを後半 2 年間の必修科目とし、これらを中心に位置づける。

選択科目の数は多いと思われるので、長期的観点から、若干の科目の整理・統合を検討する。

「英語論文」（選択 4 単位）については、大学院への進学を希望する学生には特に履修するよう指導する。

（単位互換、単位認定）

（B群 8）国内外の大学等と単位互換を行っている大学にあつては、実施している単位互換方法の適切性

1. 「現状の説明」

英文学科のひとつの特徴は、交換・推薦・私費を問わず、英語圏を中心に国外の大学に留学する学生が多いことである。学科としても、語学力向上、および人間性練磨のためにも、留学は奨励している。これに対応し、単位互換を行っている。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

留学先大学の発行する書類が整っていれば、個々のケースごとに英文学科会議、教授会の審議を経て、留学先の該当授業の出席時間数と成績を内容的にもっとも近い本学開設科目の単位と成績に換算し、単位認定ができる。しかし留学先大学が発行した受講科目の内容説明（シラバスおよび担当教員のコメント）が必ずしもはっきりしないことがあり、確認等の作業に時間がかかる場合がある。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

本学を「休学」しての留学の場合は、単位互換は資格上認められない。また、書類が整わなければ、互換はできない。これらのことを学生に前もってしっかり徹底しておかねばならない。留学先の大学が出した成績を本学のものに換算する際、先例の蓄積がある場合は比較的容易だが、ない場合は当該大学の教育レベルを測る資料が必要である。

（B群 9）大学以外の教育施設等での学習や入学以前の既修得単位を単位認定している大学・学部等にあつては、実施している単位認定方法の適切性

1. 「現状の説明」

学校教育法第52条の大学を卒業、または中途退学し、本学の一年次に入学したものについては、共通科目・専門科目単位について、合計30単位を超えない範囲で認定することができる。3年次に編入学した学生は、既修得単位のうち62単位までを一括して認定している。その他、大学以外の教育施設での学修の単位認定は、きわめて限られている。

英文学科は、上記の、本学の規定に基づき、単位認定を行っている。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

既修得単位の認定については、妥当と考えられ、とくに問題はない。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

とくに問題はないので、改善策を検討する必要はない。



## (B群 10) 卒業所要総単位中、自大学・学部・学科等による認定数の割合

### 1. 「現状の説明」

他の教育施設等で修得した単位を英文学科としても認定する最大単位数は計62単位（編入学の場合、これに当たる）であり、卒業所要総単位数である124単位の半分である。また留学で取得した単位を換算する場合、年間にして60単位を超えることはできない。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

留学して単位を取得する場合、現地での受講の困難さ（言語の壁、課題の多さ等があり、多くの科目を履修できない現実がある）があり、英文学科の学生においても、年間20単位以上修得したケースはない。多く履修すれば、それだけ各科目を深く勉強できなくなるので、むしろ、出発前に、現地で余り多く履修しないようにアドバイスしている。しかし、将来、多くの科目を履修する者も出てくる可能性があるため、本学科で履修しなければならない最低単位数については検討の必要がある。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

英文学科の卒業要件（2003年度生より施行）のひとつは、必修・選択必修 46 単位（専門科目 22 単位、共通科目 24 単位）であり、これらは、英語力を養成するための 4 技能および一般教養の最低限度の科目であるとしているが、再検討していきたい。

## (開設授業科目における専・兼比率等)

## (B群 11) 全授業科目中、専任教員が担当する授業科目とその割合

### 1. 「現状の説明」

英文学科の開設専門科目は現行カリキュラムでは、必修 15 科目、選択 73 科目。兼任教員は 4 名で、1 名の兼任教員がゼミ 2 コマ（4 科目）をもつ他は、全 4 名が選択科目 6 コマ（12 科目）を担当している。それ以外は専任教員が担当している。したがって、専任教員が担当する授業科目は 76 科目であり、全体の 86.4%にあたる。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

学生と接触する機会の多い専任教員がほとんど（86.4%）の科目を担当していることは極めて望ましいことである。しかし、定年その他で退職する専任教員が相次いでおり、毎年補充（専任教員採用または客員か非常勤教員採用）を考えていかねばならない。

とくに、学生にとっては、常に接することのできる専任教員が多い方が有り難いことは間違いない。本学が定めた教員定数の範囲で、専任教員を補充していく。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

2005 年度に新規に専任教員を 2 名、兼任教員を 1 名採用予定であり、本学科の専任は 14 名となり、80 科目を担当し、全科目の 90.9%となる。しかし、2005 年度と 2006 年度に各 1 名、専任教員が退職するので、2006 年度以降も教員の補充が必要である。英文学科の教員定数を考えると、2006 年度までに、さらに 3 名の専任教員の補充が必要である。

とくに、今後、力を入れたい翻訳・通訳分野の科目を担当できる教員を採用したい。

## (B群 12) 兼任教員等の教育課程への関与の状況

### 1. 「現状の説明」

現在、英文学科には4名の兼任教員がいる。担当科目については、1名の教員がゼミ2コマ(=4科目8単位)を担当している他は、全4名が専門科目計6コマ(選択で12科目24単位)を担当している。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

兼任教員には今後とも、ゼミは別として、選択科目を担当してもらいたいと考えている。必修科目は、ほとんど大学にいて、学生の質問にいつでも答えられる専任教員が担当すべきであろう。現在のところ、とくに問題点はない。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

兼任教員には、専任教員でカバーできないが学科としてぜひ必要な科目(選択)を埋めてもらいたい。

## (生涯学習への対応)

## (B群 13) 生涯学習への対応とそのための措置の適切性

### 1. 「現状の説明」

社会人学生と科目等履修生の受け入れを除けば、英文学科として生涯学習の取り組みは特に行っていない。科目等履修生では、教職課程の科目を取る者がほとんどでその人数も少ない。ただ、通信教育部で英語の科目を担当している教員が多く、通信教育部を通じて生涯教育に貢献していると言える。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

社会人学生、科目等履修生の数は非常に少ない。通信教育部で英語や文学の科目の担当をしている。生涯教育の対応は特に必要なく、現状のままでよいと判断する。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

大学が生涯教育を行うことへの要望は年々増しており、英文学科として、通信教育部以外の領域でどのように生涯教育に取り組んでゆくのか議論を始める必要がある。1つの対処法として、大学の夏季大学講座に積極的に参加することも考えられる。

## (2) 教育方法等、(教育効果の測定)

## (B群 14) 教育上の効果を測定するための方法の適切性

### 1. 「現状の説明」

ほとんどの科目が各セメスターの終わりに定期試験を実施している。また、定期試験に加えレポートの提出や、授業中の小テストを行う科目もある。毎回の授業では出席をきちんととり、3分の1以上の授業を無断で欠席した学生には単位を認定しないことになっている。演習科目では、学生が授業中に行った発表・意見に応じて平常点を与えている。以上の結果を総合的に測定し、各学生の成績を決めている。2003年度より「卒業研究」を

廃止し、その8単位分を選択科目から自由に履修できるようになった。選択科目の中に新たに「英語論文」(4単位)を用意し、学生が自主的に英語の論文を書けるようになった。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

現行のやり方で適切であり、特に問題点はない。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

将来なにか問題が生じた場合、検討を行う。

(B群 15) 教育効果や目標達成度及びそれらの測定方法に対する教員間の合意の確立状況

1. 「現状の説明」

学科会議や学科内の教務委員会で、問題がある場合は常に議論を行い合意の確立を目指している。しかし、最終的には個々の教員の自由裁量を重んじる傾向がある。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

教育効果や目標達成度の測定方法には、個々の教員の裁量に任せる部分が多い。同一科目名複数担当教員の場合、それぞれの教員が独自に目標を設定しているため、学習内容の難易度にばらつきがあり、教育効果の測定方法が異なることがある。その結果、学生に不平等感が生じる場合がある。成績に関して、一部の科目では教員間の申し合わせができている。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

同一科目を担当する教員がそれぞれの学年に応じて、適切な目標とその達成度・教育効果の測定方法を、ある程度統一するための議論が必要である。

(B群 16) 教育効果を測定するシステム全体の機能的有効性を検証する仕組みの導入状況

1. 「現状の説明」

英文学科としては、教育効果を測定するシステム全体の機能的有効性を検証する仕組みは導入していない。各教員がどのようにして教育効果を測定しているか、それが有効であるのかどうかは各教員の裁量に任されている。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

導入されていないので評価できない。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

英文学科として、より良い教育効果をあげるためには、教育効果を測定するシステムが全体的に有効に機能しているかどうかを検証することが不可欠である。そのような方策を導入する方向に向けて今後議論を始める。

(B群 17) 卒業生の進路状況

## 1. 「現状の説明」

英文学科の卒業生は、毎年 10 名前後が、中・高の「英語」教員採用試験に合格している。地方公務員にも合格者を出している。また、国内外の企業（商社、旅行会社、航空会社、銀行、放送局、IT 企業等）、各種学校（会話学校、予備校、塾）に就職する他、さらなる研究のために大学院に進学したり、海外の大学・大学院に留学したりするなどしている。2004 年度の卒業生には、外務省の在外公館派遣員の合格者も出した。

2003 年度卒業生（計 117 名）の内訳は、民間企業 69、教員 6（就職者合計 75）、進学 4、留学 2、留学・進学希望及び公務員・教職・就職浪人 27、一時的仕事 5、その他 4 であった。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

教員採用試験には毎年 10 名前後が合格している。卒業生の約 7 割が一般企業への就職や進学・留学を果たしており、卒業後の進路においてもそれなりの成果を上げている。半面、進学・留学希望者と公務員・教職・就職浪人を合わせると卒業生の約 2 割が進路未定のまま卒業している。これらの卒業生の進学先や就職先をきちんと追跡する必要がある。また、各ゼミの教員はゼミの卒業生の進路を周知しているが、英文学科全体として各卒業生の進路・就職先を把握し、共有していない。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

教職浪人や就職浪人を出さないため、早期の段階でそれぞれの準備を始めるように、今まで以上に指導を徹底する方策を学科としても検討し実施すべきであろう。また、英文学科として卒業生の進路・就職先を掌握するシステムを作り、それを現役生の就職活動や指導に生かすことが重要である。さらに、進路未定のまま卒業した学生の進学先・就職先を掌握するシステムが必要である。

(厳格な成績評価の仕組み)

(A群6) 履修科目登録の上限設定とその運用の適切性

## 1. 「現状の説明」

英文学科の履修制限の上限は「各期30単位」である。「1日6単位（3科目～5科目）×5日」の計算で、「教職課程の単位は除外」している。英文学科には教職志望者が多く演習科目も多いので、1～2年次の学生はほとんど「空きコマ」がないほどである。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

卒業のための必要単位は 124 単位なので、3 年前期までで、必要な単位はほとんど履修することが可能である。4 年次は就職活動や教育実習で忙しくなるので、学生にとっては適度な体制ではないだろうか。履修制限は、学生が履修科目を絞って、選んだ科目に時間をかけ、深く勉強できるようにと考えられたものであり、英文学科の場合は演習科目も多いので、各学生の希望や個人差を考慮することも必要である。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

2003年度より、「英語表現演習」（1～2年次必修）と「現代英語演習」（選択）が1単位認定から2単位認定に変わった。履修科目数がこれで緩和されるであろう。5時限目は、おもに教職等の特設科目のための時間帯であるため、とくに「履修制限」の上限を上げる必要はない。

## （A群7）成績評価法、成績評価基準の適切性

### 1. 「現状の説明」

英文学科は、多くの教員が学生の授業中の平常点、小テスト、レポート、定期試験等を考慮しながら総合的に成績を出しており、統一はしていない。基本的に絶対評価をする。しかし、同一名の科目を複数の教員が担当する際には、教員によって成績の基準が異なりと不公平になるので、関係教員の間で打ち合わせをし、割りふりの調整をする場合がある。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

同一名の科目および選択科目の「成績基準」の調整は必要である。厳正な成績評価が恒常的に行われるよう事前に方策を練る必要がある。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

選択科目についての「成績基準」の調整はまだできていない。学科内の教員間で打ち合わせる必要がある。

## （厳格な成績評価の仕組み）

## （B群18）厳格な成績評価を行う仕組みの導入状況

### 1. 「現状の説明」

全学的に三分の二の出席が定期試験の受験要件となっており、また現行の試験点数と評価の関係は、90点以上がD、80点～89点がA、70点～79点がB、60点～69点がC、59点以下がD（不合格）となる。上記の基準に加え、同一名の科目を担当する教員間あるいは学科会議で評価について話し合いをもつ場合がある。それ以外には現在、とくに導入していない。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

同一名の科目について問題は解決しているものもあるが、選択科目についての話し合いはまだできていない。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

担当教員間の話し合い以外にも、より適切な「仕組み」があれば導入を検討する。成績の公表による相互比較の体制は全学的にできあがっているため、それを基に各科目の性格も考慮しつつ、学科内での検討が必要である。

## （B群19）各年次および卒業時の学生の質を検証・確保するための方途の適切性

### 1. 「現状の説明」

大学全体として、新入学生の英語力、および本学の「英語」教育が効果を上げているかどうかを見るために、定期的（4月と12月）に、ITPテスト（＝TOEFL予備テスト）を行っている。各年次の英語力を見ることで、ほぼ学生の「質」はわかり、対策を講じることができる（ITPテスト受験は全学年無料で行っている）。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

ITPテストはTOEFLと同じ形式・内容なので、学生の国際レベルでの実力（「学生の質」）を測るためのよい制度である。学生も自分が留学できる実力があるかどうかを知ることができる。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

本学からの推薦および交換の留学生の選考資料にITPの結果を（TOEFLの結果と同じく）認めるようにすれば、皆が受けるようになるだろう。英国への留学のためIELTSの指導もさらに充実する必要があるだろう。

なお、2003年度より、共通科目の「英語A～D」も習熟度によるクラス分けのためにITPの結果を用いている。英文学科の「英語AB」は習熟度別にはせず、英文学科生固有のクラス編成とし、1クラスあたりの受講者数も30人程度に抑え、ネイティブスピーカーやクラス担任による指導を行っている。しかし、英文学科の「英会話B」（選択）は、2003年度より習熟度別を実施している。今後ITPその他の結果をさらに有効に利用することが必要になるであろう。

## （履修指導）

### （A群8）学生に対する履修指導の適切性

#### 1. 「現状の説明」

入学直後の学科ガイダンスに専任教員が出席し、大学生生活の心構えを話し、履修指導を行っている。その後、クラス別ガイダンスがあり、担任からさらに詳しく履修その他について話をしている。その後の各期始めのガイダンスは「履修ガイド」（冊子）があるので、とくに学生を集めて行ってはいない。しかし2年次の後期開始時にゼミ履修ガイダンスを行っている。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

英文学科では、クラス担任が1～2年次の必修科目を少人数クラス（30人程度）体制で教えることを目指す。担任は、さらに、1～2年次の選択科目でも同じ学生たちを教えることになるので、担当学生との接点が多い。学生たちはごく自然に、履修についての相談もしており、履修指導上の問題はほとんどない。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

クラスの少人数化なども功を奏して現行での履修指導は概ね、順調である。しかし今後、大学を取り巻く社会や学生のニーズの多様化に伴いカリキュラムの変更も予想される。さらにきめ細かく柔軟な対応が必要である。

## (B群20) オフィスアワーの制度化の状況

### 1. 「現状の説明」

オフィスアワーを設けている教員もいるが、特定の時間をオフィスアワーに当ててではなく、必要に応じてオフィスアワーを連絡する教員もいる。また、オフィスアワー以外に研究室を訪れた学生には随時対応する用意もある。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

担任制度が定着しているので、1～2年次の学生はごく自然に担任の研究室を訪れ、履修その他の相談をしている。また、3～4年次生はゼミ教員に相談できる制度になっている。その他の教員のところへも、とくにオフィスアワーと関係なく、学生が相談に行く場合もある。現在のところ、日常的に学生の相談に応じられる状況にある。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

2003年度より、担任の数が倍になり、ますます担任制度の機能が充実したので、現状特に問題はないと思われるが、今後のオフィスアワーについては英文学科の学生の意見も聞き、検討する。

## (B群21) 留年者に対する教育上の配慮措置の適切性

### 1. 「現状の説明」

ゼミ担当教員が、留学した学生も含め留年生を指導している。ゼミ担当教員が在外研究あるいは定年で不在のときは、学科コーディネーターが指導している。

本学科の場合、留年する理由の多くが海外の大学への留学である。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

留年生はゼミ担当教員あるいはコーディネーターと連携をとっており、だいたい問題は解決している。この2者でも解決できない場合は、学生課にも加わってもらっている。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

日頃、学生の種々の相談に応じている学生課、また専門のカウンセラーとの緊密な連携がますます必要となるだろう。その場合、言うまでもなくプライバシーの保護が絶対条件である。

## (教育改善への組織的な取り組み)

### (A群9) 学生の学習の活性化と教員の教育指導方法の改善を促進するための措置と有効性

#### 1. 「現状の説明」

(1) 学生対象の授業アンケートまたは随時の対話、感想記述等により、担当教員が各授業の反応・効果を考慮に入れながら、鋭意工夫を重ねている。

(2) 学生の実力・関心の実態に応じて、また英文学科の理念から考えてあるべきレベルを目指して、教科書・教材を選択、収集、研究する努力を続けている。

(3) 視聴覚メディアを多く利用するようにしている（特にAV/CALL教室の授業）。

(4) 具体的なシラバスを示し、授業の目的・進め方を明示している。

(5)創価大学英文学会（学内学会）主催で、年2回の学内外の学者による講演会、年2回発行の紀要（会員の論文発表誌）により、学生に学問的刺激を与えている。また年1回 Newsletterも発行し種々の情報を提供している。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

(1)アンケートは、教員自ら自己の教育指導方法を客観視し、その改善を目指すための手段としては重要である。ただし、具体的な設問内容や一律のフォーマット等に問題もあり、さらなる検討を加える必要がある。

(2)教材研究について、授業運営費が支給されるのは大きな励みであり、前進である。

(3)視聴覚メディアの技術の進歩はめざましく、学生にパソコン等の基本操作を習得させると同時に教員も授業等に活用できる努力が必要である。しかし、学生とともにじっくり思索し、議論できる授業を行うことも必要であり、過度にメディアに依存した授業に陥らない努力も必要である。

(4)シラバスの導入により、学生にとっても、教員自身にとっても、授業の進め方・ポイントが明瞭になった。

(5)創価大学英文学会の講演会で、各分野の最先端の話聞き、紀要を読んで教員や学生・院生の日頃の研究成果を知ることで、大きな学問的刺激となっている。また年1回

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

アンケート以外でも、あらゆる機会、あらゆるレベルで教育指導方法の改善を貪欲に探っていくことが必要であろう。

## （A群 10）シラバスの作成と活用状況

### 1. 「現状の説明」

シラバスには科目ごとに「授業のテーマ」、「授業の進め方」、「到達目標」、「評価・試験方法」、「教科書」、「参考書」、「履修上のアドバイス」が載せられている。さらに第1週の授業で毎回の授業内容についてのシラバスを発表する教員も多い。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

学生が履修する授業の「目標」、「進め方」、「評価方法」を前もって知っておくことは重要である。“心構え”ができるからである。教員からすれば、当初の「目標」を見失わずに授業を進められる。後で“達成感”も得られる。特に「選択科目」においては、シラバスは大事である。英文学科教員のシラバスはほぼ整った内容であり、特に問題はない。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

共通科目の「英語」は習熟度別クラス編成になったため、シラバスは今まで以上に丁寧に、分かりやすくする必要がある。

## （A群 11）学生による授業評価の活用方法

### 1. 「現状の説明」



講義アンケートは本学においてはすでに定着したものとなり、担当各教員が授業の質向上に有効に利用している。またアンケートの結果を踏まえ、FD活動との連携などによりさらにその意義は高くなっている。

象牙の塔ではなく授業内容が学生、社会、他教員の評価、批判を受けることは時代の趨勢であり不可欠なものとなっている。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

アンケートの質問内容・形式は改善されているが、アンケートの客観性、公平性などはさらに検討、改善が必要であり、アンケート結果がどれだけ実際に授業内容改善に反映されているかもチェックが必要である。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

アンケートの質問内容・形式などはさらに検討、改善が必要であり、一層客観的、公平なものにしていかなくてはならない。また、各教員がアンケート結果をさらに真摯に検討し授業内容改善に反映させる努力をし、FD活動などとの連携に努める必要がある。

### (B群 22) FD活動に対する組織的取り組み状況の適切性

#### 1. 現状の説明

学内で行われている研究授業（公開授業）に参加したり、学内学会（創価大学英文学会）の講演会に参加したり、学内外のさまざまな講師の話を参考にしている。また、大学からの派遣として、私立大学連盟のFD研究会に参加し、見識を深めている。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

英文学科の授業については、「授業アンケート」等を見ても、学生はほぼ満足しているようである。しかし、より魅力的な授業を行うために努力を続けるのは教員の責務である。FD活動への「組織的取り組み」について学科内で検討する必要がある。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

英文学科教員も「公開授業」を行うなどの積極的関わりが必要となろう。さらに多くの教員が夏季大学講座等の「公開講座」を開くこともFD活動の一環になるであろう。

### (授業形態と授業方法の関係)

### (B群 23) 授業形態と授業方法の適切性、妥当性とその教育指導上の有効性

#### 1. 「現状の説明」

英文学科の授業形態としては、講義、演習、ゼミがある。講義には2つの意義がある。学科の基本教科の全体像を示すことと、学問水準の現代の標準あるいは先端を示すことであり、前者は「概論」形式の講義によって代表され、後者は「〇〇〇研究」や「特殊講義」の名称をもつ講義によって代表される。演習は主に英文学科における4技能(listening, speaking, reading, writing)の習熟を目指すものであり、本学科ではネイティブの教員が担当する科目も含めてきめ細かい授業が編成されている。これらの演習授業は学生の英

語力向上に着実に効果を上げている。ゼミは、大学教育のひとつの柱であり、担当教員との緊密な人間関係を通して学問の専門性の具体的追求の場として極めて重要である。「人間教育」を標榜している本学にあって、十分教育指導上の有効性を発揮している。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

授業形態とその方法は現在のところおおむね適切である。語学教育は少人数が望ましく、今後問題となるのは担当教員の確保である。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

少人数教育確保のため、今後も努力していきたい。

# (B群 24) マルチメディアを活用した教育の導入状況とその運用の適切性

## 1. 「現状の説明」

英文学科においては、コンピュータの基本操作やテキストの電子化、インターネット情報の検索・活用の仕方などをそれぞれ授業内容に取り込み教授・活用している科目、授業がある。たとえば、CALL 教室等でインターネットを通じて各種 corpus や on-line 辞書を通じての最新の英語の語法に関する情報を学生に利用させたり、各国の最新情報や伝統・文化に関する情報を英米文学理解の一助として積極的に活用するよう学生に指導している。このような科目として、「コーパス英語学」「英語情報工学演習」「比較文化」が挙げられる。また、「英米文学講読」「英語表現演習」「言語学」「英語 A・B」の一部でもインターネットが利用されている。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

学生はインターネットを利用した授業を履修することにより、インターネットそしてコンピュータに親しみをもつようになっている。学生によるさまざまな研究発表・レポート等にもインターネットで得た情報が織り込まれている。しかし、大量の情報に飲み込まれてしまう可能性もあり、書籍をじっくり読んで分析することや、自分のオリジナルな考えを産み出すことができなくなることもありうる。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

学生に、マルチメディアを活用し新鮮な情報を得る作業と、読書を通しての地道な研究のバランスをとる方途を教えることが今後の課題であろう。

# (B群 25) 「遠隔授業」による授業科目を単位認定している大学・学部等における、そうした制度措置の運用の適切性

## 1. 「現状の説明」

文学部では、遠隔授業を行っている学科・専攻はまだない。この導入は必要性に基づき、設備面での環境整備が必須となる。今後検討したいという学科・専攻も出てこよう。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

とくになし。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

#### 【英文学科】

当面予定はない。

## 文学部社会学科

### I 大学・学部における主要点検・評価項目

#### 3 学士課程の教育内容・方法等

##### 評価目標

人類社会の進歩と発展に貢献しうる人材を育成する。

##### 具体的方法

社会学領域の学問を通して、深い専門性と広い教養、豊かな人間性をそなえた人材の育成につとめる。

#### (1) 教育課程等

(学部・学科等の教育課程)

(A群1) 学部・学科等の教育課程と各学部・学科等の理念・目的並びに学校教育法第52条、大学設置基準第19条との関連

##### 1. 「現状の説明」

社会学科では人類社会の進歩と発展に寄与できる人材の育成を目的にしているが、特に社会学領域の教育を通じて以下の4点を目指している。第1に社会的諸問題に対する幅広い認識や旺盛な関心を持った人材の育成、第2に社会的・歴史的現実と実証的に取り組む姿勢の確立、第3に批判精神および反省的思考態度の育成、第4に人類の多様性・多元性を認識するとともに国際的な諸問題に関する知識を身につけて優れた国際感覚を涵養することである。

こうした人材の育成を目指して社会学科では、社会全般についての幅広い知識と、専門分野での深い学芸を教授するために、2年次から専攻研究コースを選択させている。現代社会研究コース、メディア文化研究コース、国際関係研究コース、比較文化研究コースの4コースが開設され、各コースを選択した学生はそのコースの専門科目を中心として履修することになる。また応用的能力の育成を目指す「社会学演習」は2年次後期から5セメスターに渡って必修となっている。

社会学科の卒業単位124のうち、専門科目は76単位、共通科目が30単位、自由選択の枠が18単位となっており、共通科目のなかで語学系科目を2ヶ国語以上、12単位取得するように課している。また自然科学系の科目についても2単位の修得も課しており、幅広い教養の涵養を目指している。

##### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

自然科学系の科目修得によって、社会・人文分野以外への知的関心が喚起されている。

また「自由選択」の枠を使って、他学部・他学科の専門科目の修得が可能になっており、この制度は広い知識の獲得に寄与している。

コース制については、学生のニーズや現実社会の動向、担当教員数などを考慮して、従来の5コースを4コースに編成し直した。開設科目についても検討を加え、大幅に見直しを行った。特にメディア文化研究コースは、従来のマスコミュニケーション研究コースから名称を変更しただけでなく、「メディア産業論」「映像文化論」「大衆文化論」などを新たに開設し、現代のメディア文化全般について教育を行えるように体勢を整えた。これによって、教育目標のより一層の達成が可能になり、また学生のニーズに答えることもできるようになった。しかし、コースによって開設科目数や担当教員数にばらつきがあるなどの問題点は残っている。

学生の基礎学力の低下や前提となる知識の不足を考えると、専門科目と共通科目のバランスの見直しも必要だと思われる。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

専門性と広い知識とのバランスを、社会的ニーズや学生の知的レベルも勘案しながら、つねに見直していくことが必要である。

## (A群2) 学部・学科等の理念・目的や教育目標との対応関係における、学士課程としてのカリキュラムの体系的性

### 1. 「現状の説明」

現在の社会学科の教育課程は、概要として次のようである。1年次には、「基礎演習」「基礎文献演習」が必修となっているほか、各コースの概論的科目である「原論」科目が置かれている。また前提的な知識を修得する科目として「現代史」「社会学情報処理」がある。2年次からは専攻コースを選択し、それぞれのコースの配当科目を中心として履修する。2年後期からは専門ゼミも開始され、より専門的な知識の教授と、応用的な能力が育成される。3年次はゼミを中心として主体的な学修が行われ、その成果が4年次の卒業論文として結実する。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

社会学科のカリキュラムは、社会学を中心として、国際関係論・比較文化論などを備えた幅の広さと、3年半にわたって少人数のゼミで批判的思考態度と豊かな人間性が涵養されるという点でバランスが取れていると考えている。基礎的なアカデミック・スキルを身につけることからスタートした学生が、4年後には専門的な論文を書いて卒業していくことが可能なカリキュラムである。このカリキュラムを実効性あるものにしていくためには、教員の教育方法・指導方法の質的向上が不可欠である。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

各教員がカリキュラムの意図と、自分の担当科目の位置づけを十分に理解していくと

もに、教育内容の相互的な開示と点検が必要である。教員個々人の自己点検評価がなされるべきである。

### (A群3) 教育課程における基礎教育、倫理性を培う教育の位置づけ

#### 1. 「現状の説明」

1年前後に「基礎演習」を置き、本の読み方、レポートの書き方、図書館の利用の仕方などが習得できるようにしている。また同時に、時事問題についてレポートを求めると、様々な社会問題への関心を喚起するとともに、平和と人権の意識を高めている。また2003年度より、1年後期にも「基礎文献演習」を開設し、ここでは基礎的な専門書をゼミ形式で読んでいくなかで、専門分野の読書力・読解力を養成している。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

入学直後にゼミ形式で行われる「基礎演習」は基礎教育および倫理性の涵養において大きな役割を果たしている。学生は基本的なアカデミック・スキルを身につけると同時に、現代世界の様々な問題に目を開かれる。また「基礎文献演習」は、専門分野の読解力、きそ知識を養成する上で効果を挙げている。担当する教員がより自覚的に取り組むことが必要である。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

専門分野とリンクした語学力、情報処理能力の養成が可能になるよう、努めていく。

### (B群1) 「専攻に係る専門の学芸」を教授するための専門教育的授業科目とその学部・学科等の理念・目的、学問の体系性並びに学校教育法第52条との適合性

#### 1. 「現状の説明」

卒業に要する専門科目の単位数は72単位であるが、1年次には、幅広く現実社会の問題への関心を喚起し、かつ各専攻コースの概論的知識を得るために、4つの原論科目が置かれている。学生には各科目を履修するよう指導している。

2年次から始まる専攻コースには、現代社会研究コースには「家族社会学」など17科目、メディア文化研究コースには「社会心理学」など13科目、国際関係研究コースには「国際関係論」など15科目、比較文化研究コースには「比較文化論」など12科目が置かれ、各分野について専門的かつ体系的に学修することができる。専攻したコースからは10単位以上に取得を課している。

また2年次後期からは、更に深く個別のテーマについて研究するとともに、応用的能力の展開を目指す場として「演習」が行われる。またこれ以外に、福祉関連の科目が10科目置かれており、高齢社会のなかで必要性高くなっている福祉関係の知識を体系的の学ぶことができる。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

1 学年 100 人定員で専任教員数 15 名の学科としては、現状のコース制及びその開設科目によって、現代社会について幅広くかつ専門的に知識を教授するとともに、国際的な諸問題についても知識と感覚を磨くことができているといえよう。しかしコースによっては学問的な体系性が不十分なものもあり、科目の更なる充実が必要である。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

コースへの教員の配置や、開設科目のバランスを見直すことで、専門性と体系性を保っていかなくてはならない。

## (B 群 2) 一般教養的授業科目の編成における「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養」するための配慮の適切性

### 1. 「現状の説明」

社会学科の卒業に要する共通科目の単位数は 30 単位である。従来は共通科目の履修については、語学系科目についての「2ヶ国語以上、12 単位」という条件しかなかったが、2003 年度より、語学系科目以外にも選択必修科目を指定することで、自然分野なども含めた幅広い教養を培うことを目指している。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

文科系の学生にも自然科学的な教養も含んだ総合的な判断力が求められており、共通科目のなかに自然分野の選択必修科目を定めたことは適切であると思う。だがその単位数は多くなく、十分なものとはいえない。一方で、現代社会を考察していくためには、社会学以外の経済学や法学など他の社会科学の知識も必須であり、共通科目の履修指導を十分に行う必要がある。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

専門科目と共通科目の質的・量的なバランスを見直す必要とともに、オリエンテーションなどで履修指導を徹底していく。

## (B 群 3) 外国語科目の編成における学部・学科等の理念・目的の実現への配慮と「国際化等の進展に適切に対応するため、外国語能力の育成」のための措置の適切性

### 1. 「現状の説明」

社会学科では国際的な諸問題に対応できる知識と感覚を持った人材を育成するという目的実現のために、語学系科目の卒業要件を 12 単位とし、かつ幅広く外国語を学ばせ国際感覚を養うために、2ヶ国語以上の履修を条件づけている。また「外書講読」も英語だけではなく、中国語・ロシア語の講読を 2・3 年次の 2 年間にわたって学習できるようにしている。また共通科目のなかで、「英語で学ぶ社会学」を開講している。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

「2ヶ国語以上、12 単位」という外国語科目の卒業要件は外国語能力の育成のために

適切である。また「外書講読」も専門分野の外国語能力を育成する上で重要である。だが現状では、英語の「外書講読」はともかく、中国語やロシア語の「外書講読」の履修者はあまり多くない。また内容的にも、単に外国語の専門書が読めるようになるだけでなく、ライティングやスピーキングの能力向上も必要であるが、現状ではこの課題に十分に答えられていない。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

学内のネイティブスピーカーの教員にも協力してもらい、学問的な専門性をもったオールラウンドな語学力を涵養していく必要がある。

## (B群4) 教育課程の開設授業科目、卒業所要総単位に占める専門教育的授業科目・一般教養的授業科目・外国語科目等の量的配分とその適切性、妥当性

### 1. 「現状の説明」

英文学科の卒業所要単位は124単位で、「専門科目74単位(88科目を提供)」「共通科目(外国語以外のもの)18単位(約180科目を提供)」「共通科目・外国語 12単位(「英語AB」必修8単位、英語以外は約75科目の中から4単位選択必修)」および「自由選択科目 20単位(上記「専門科目」と「共通科目」の科目から余分に履修したものをこの単位に入れることができる。その他、他学部専門科目や教職科目も入れてよい)」の合計となる。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

自由選択の枠を 18 単位とすることで、学生が主体的に自分の問題関心に応じて他学部・他学科の専門科目を卒業要件の単位のなかで履修することができることは、学生の主体的な科目選択を可能にしており、妥当である。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

情報処理能力に対する社会的ニーズを考えると、この関連の科目の充実に取り組む必要がある。

## (B群5) 基礎教育と教養教育の実施・運営のための責任体制の確立とその実践

### 1. 「現状の説明」

教養教育の運営を全体的に担うのは共通科目運営センターであり、そこに学科の要請を反映するようになっている。また、社会学科では1年次の前期・後期に「基礎演習」・「基礎文献演習」という少人数ゼミ形式の授業を必修としており、学科教員が基礎教育への責任をもっている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

教養教育については学科単位では点検・評価はできないが、基礎教育に関しては強く関心をもっているといえる。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」



基礎教育についてはとくに問題はない。教養教育については全学的体制のもとにおこなっているため、学科単位での方策は策定しにくい。しかし学科教員が積極的に関わっていくことで、関心を強くもち、よりよい教養教育のあり方を検討していきたい。

(カリキュラムにおける高・大の接続)

(A群4) 学生が後期中等教育から高等教育へ円滑に移行するために必要な導入教育の実施状況

1. 「現状の説明」

社会学科では1年前期後期に「基礎演習」と「基礎文献演習」という少人数の演習形式の授業を必修として置き、高校までとは違う大学での学習方法を中心に教授することで、学生が円滑に大学教育に対応できるよう努めている。

また創価学園からの推薦入学者には「入学準備プログラム」として課題を出し、レポートを添削している。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

「基礎演習」を通じた学習指導は、学生が円滑に大学教育に適応していく上できわめて適切であると考えられる。「基礎文献演習」も、社会学科の学習に必要な専門書の読解力を中心に、学習能力の育成を図っている。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

大学での学習に必要なコンピューター・スキルなども1年次に習得できるような制度が必要であり、検討していく。

(履修科目の区分)

(B群7) カリキュラム編成における、必修・選択の量的配分の適切性、妥当性

1. 「現状の説明」

現状は卒業所要の専門科目単位数76のうち、必修科目は20単位、選択科目が56単位である。必修科目の内訳はゼミが12単位、卒業論文が8単位である。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

ゼミ・卒業論文以外に必修科目はなく、学生の科目選択の幅は広く確保されていると思われる。ゼミと卒業論文は社会学科の教育課程の根幹をなすものであり、必修をはずすことは妥当ではない。しかし、ゼミや卒論の指導教員については、学生の選択の幅を広げ、変更もできるようにすべきであろう。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

特にない。

(授業形態と単位の関係)

(A群5) 各授業科目の特徴・内容や履修形態との関係における、その各々の授業科目の単位計算方法の妥当性

1. 「現状の説明」

社会科学では、必修である卒業論文を除けば、全専門科目が週1回の授業(90分)、15週(1 Semester)で2単位である。卒業論文については前期の卒業論文研究Ⅰが2単位、後期の卒業論文研究Ⅱが4単位となっている。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

学生の実際の学習時間を考えれば、演習科目も講義科目も同じ単位数であることは妥当だと思われる。実際には演習科目の方が自宅での準備学習が必要とされる。しかし徐々に、講義科目でも、宿題やレポートが課せられることが多くなっており、こうした現状からすれば、単位数が同じであることに問題はない。卒業論文の総単位数が6単位であることは、論文執筆に要する学生の自己研鑽時間を考えれば少ないくらいである。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

単位数については、単位計算方法を見直すより、現行の計算方法の前提になっている学生の自己学習時間が実際に担保されるような授業方法を行っていくことが大事である。

(単位互換、単位認定)

(B群8) 国内外の大学等と単位互換を行っている大学にあつては、実施している単位互換方法の適切性

1. 「現状の説明」

現在、国内の大学との単位互換は行っていない。国外の大学とは約60の大学と交流協定を締結して交換・推薦留学制度がある。留学先で修得した単位は60単位まで認定されている。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

留学先で取得した単位数のうち、社会科学の専門科目として認定されるものは、現状では多くない。したがって語学系の学科が留学しても4年間で卒業できるのに対して、社会科学の学生が留学すると1年卒業が延びることになる。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

自由選択の枠の利用や、単位互換制度の柔軟性を高めることで留学が不利にならないようにすべきである。

(B群9) 大学以外の教育施設等での学習や入学以前の既修得単位を単位認定している大学・学部等にあつては、実施している単位認定方法の適切性

1. 「現状の説明」

既習得単位は30まで認定されている。3年次編入では、共通科目32単位、専門科目

30 単位の計 62 単位が一括認定されている。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

一般の3年次編入学生には専門試験（社会学）を課しているのですが、その成績によって単位認定することは実際の専門知識に応じた単位認定であり、妥当であると思われる。だが、創価女子短期大学からの推薦編入学入試には学科の試験がなく、専門科目として単位認定するのは問題がある。実際にも、基礎知識が不足しがちである。単位認定を担保するなんらかの方法が必要であろう。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

創価女子短期大学と協議した上で、推薦編入の学生には社会学の既修を条件にするか、聴講生として履修することを義務化するなどの方策が考えられる。

## （B群 10）卒業所要総単位中、自大学・学部・学科等による認定数の割合

### 1. 「現状の説明」

編入学の場合、最大 62 単位まで認定される。編入学生を別にすれば、社会学科の専門科目のうち、本学科以外で認定されるものは、現状ではほとんどない。共通科目では、留学や海外の語学研修での単位が認定されている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

データの整備が必要である。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

学生の単位取得データの整備に努める。

## （開設授業科目における専・兼比率等）

## （B群 11）全授業科目中、専任教員が担当する授業科目とその割合

### 1. 「現状の説明」

演習科目（「基礎演習」、「基礎文献演習」、「社会学演習Ⅰ～Ⅴ」）はすべて社会学科の専任教員 15 名で担当している。また「卒業論文研究Ⅰ・Ⅱ」もすべて社会学科の専任教員の担当である。上記演習科目を含めた社会学科全専門科目 80 のうち、専任教員が担当する科目は 54 であり、比率は 68% である。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

学生の教育に質的にも量的にも深く関わる演習科目や卒論はすべて専任教員が責任をもって担当しており、授業時間以外にも学生と触れる事が可能であり、人間教育の中核を担っているといえる。今後もこの体制は維持していくべきである。ただ演習科目だけでも教員の負担するコマ数は多くなっている。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

専任教員数が減少するなかで、演習科目をすべて専任教員が担当していくことは困難になりつつある。全教員が演習を毎年度担当する制度は見直すことが必要である。

## (B群 12) 兼任教員等の教育課程への関与の状況

### 1. 「現状の説明」

2004年度は80科目の専門科目のうち、26科目を兼任教員が担当している。比率は33%である。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

メディア文化研究コースでは専任教員が1名しかおらず、5人の非常勤講師に依存している。講義科目のなかで兼任教員の割合が高いため、全体のカリキュラムのなかでの科目の位置づけ等をよく理解してもらう必要がある。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

専任教員と兼任教員との意思疎通を恒常的に図ることが大事になろう。

## (生涯学習への対応)

## (B群 13) 生涯学習への対応とそのための措置の適切性

### 1. 「現状の説明」

社会人を対象に編入学試験を行っているが、入学者は多くない。学科としてではないが、学科の個々の教員は通信教育を担当したり、一般向きの夏季大学講座を担当したりしている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

現状で特に問題はない。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

特にない。

## (正課外教育)、(2) 教育方法等、(教育効果の測定)

## (B群 14) 教育上の効果を測定するための方法の適切性

### 1. 「現状の説明」

Semesterごとに定期試験が行われるが、本学科ではいわゆる筆記試験よりも、レポート提出によるものが多い。最終的には、卒論作成が4年間の教育効果を測定するものさしとなる。卒論に対しては複数の教員による口答試問もあり、代表による発表会も行われている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

応用的能力の測定としてはレポートによる方法は優れているが、授業全体の教育効果の測定としては問題が含まれると思われる。筆記試験にせよ、レポート試験にせよ、長短があり科目の特性や目標に応じて使い分けていくべきであろう。ただ、教員側に、試験は自らの教育の効果を測定し、それによって教育方法を見直す機会であるという意識があまりないように思われる。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

定期試験とレポートとの機能の違いを各教員が認識することが改善の出発点である。

## (B群 15) 教育効果や目標達成度及びそれらの測定方法に対する教員間の合意の確立状況

### 1. 「現状の説明」

現状では、社会学科教員間に教育効果の測定方法について合意はない。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

学科として、教育効果の測定方法について合意がないのは問題である。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

測定方法の妥当性について、検討すべきである。ただこの問題は教務関係の委員会を中心に全学的に検討されつつあり、今後一定の見解がでてくる可能性もあり、そうした検討に積極的に加わっていきたい。

## (B群 16) 教育効果を測定するシステム全体の機能的有効性を検証する仕組みの導入状況

### 1. 「現状の説明」

社会学科には、教育効果の測定システムの機能的有効性を検証する特別な仕組みはない。現時点では個々の科目の成績評価分布はまだ公開されていない。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

現状ではどのような教育効果を達成したかを全体的に検証することができず、したがって教育方法の見直しも体系的には行えない。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

教員各自の教育効果の測定方法が妥当性をもつものであるか否か、検証できる仕組みを導入すべきである。そのためには、教員の成績評価の公開が前提になる。その上で、学生の全体的な成績が教員に知らされることが必要である。さらに、卒業後の追跡評価なども行う必要がある。

## (B群 17) 卒業生の進路状況

### 1. 「現状の説明」

社会学科の卒業生は、サービス業と卸売・小売関係がほぼ各 30%程度と多く、次いで製造関係、金融関係(各 10%内外)となっている。その他に、進学する者も 15%程度はいる。ただ現在のところでは、卒業生の進路状況について、学科として特別に検討してはいない。またデータも就職部がまとめたものだけである。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

大学教育の社会的使命や、教育効果を考えるとき、卒業生の進路状況の全体像を点検・

評価することは、不可欠である。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

学生の進路状況について情報収集し、データとして蓄積し、それをもとに教育を見直していくことが望ましい。

(厳格な成績評価の仕組み)

#### (A群6) 履修科目登録の上限設定とその運用の適切性

##### 1. 「現状の説明」

社会学科では早期卒業制度を採り入れていることもあり、また学習効果を高めるために、1セメスターの履修上限を20単位に設定している。また、GPA3.2以上の成績優秀者には上級年次の科目を含めて24単位までの履修を認めている。

##### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

履修の上限設定は、学生の学習効果を考慮するとき、必要な制度である。20単位という上限も適切だと思われる。しかし、この制度が適切性をもつためには成績評価の厳格性が保たれねばならない。

##### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

現在のところ特別な方策はないが、成績評価の厳格さをどのような仕方で保つかを検討していく必要がある。

(A群7) 成績評価法、成績評価基準の適切性

##### 1. 「現状の説明」

定期試験(レポート試験を含む)の成績基準は本学の定めたものにしたがっている。すなわち、出席が3分の2以上によって定期試験の受験が可能となり、90点以上が④、80~89点がA、70~79点がB、60~69点がC、59点以下がD(不合格)となる。

##### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

成績評価は相対評価ではないので、教員間でかなりのばらつきがある。このようなばらつきは学生の勉学意欲を阻害する場合があります、問題である。

##### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

成績評価の科目ごとの分布は公開すべきであり、それをもとに成績評価法について教員間で合意形成すべきである。

(厳格な成績評価の仕組み)

#### (B群18) 厳格な成績評価を行う仕組みの導入状況

##### 1. 「現状の説明」

全学的3分の2以上の出席が定期試験の受験要件となっており定期試験の評価は全学的な基準に従っている。学生が評価に不満や意見がある場合は、申し出るようになっていく。

現在のところ、社会学科では各教員の成績評価が公表されておらず、成績評価の科目ごとのばらつきをチェックする仕組みはない。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

甘すぎる成績評価も、厳しすぎる成績評価も、現状ではほとんどノーチェックともいえ、学生に不平等感を与えることもある。ただ、学生側から自分の成績評価に対する質問をする制度があり、結果的にある程度のチェックを果たしてもいる。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

厳格な成績評価を行うためには、まず、成績の公表化を行い、相互にチェックできる仕組みにすることが必要である。

## (B群19) 各年次および卒業時の学生の質を検証・確保するための方途の適切性

### 1. 「現状の説明」

社会学科では、以前あった修得単位数による関門制度のような、年次ごとに学生の質を検証・確保するための方途は講じていない。だが履修単位の上限を設けることで、ある程度、年次ごとの学修結果を確保する効果は出ている。卒業時においては、卒業要件の単位数の取得と、卒業論文の執筆が卒業する学生の質を確保する手段となっている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

卒業論文の執筆・作成は4年間の学業の集大成であり、学生の質を確保する手段でもあるが、近年は多少、形式・内容とも多少ルーズになりがちである。卒業論文についても厳格化が必要と思われる。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

卒業論文の質的向上を目指して、教員間で検討・合意することが必要である。

## (履修指導)

### (A群8) 学生に対する履修指導の適切性

#### 1. 「現状の説明」

1・2年生には4月のはじめに履修・学科ガイダンスを行っている。特に学科ガイダンスは「基礎演習」のクラスごとに少人数で行い、カリキュラムの内容と目的の徹底を図っている。このときには社会学科独自に作成したカリキュラム説明の小冊子も配布している。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

社会学科のカリキュラムにはコース制があったり、ゼミも2年後期にスタートしたり、他学部・学科とは異なる面が多いが、ほとんど混乱も生じていないので、ほぼ履修指導は適切に行われているといえよう。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

今後を考えると、制度はより複雑になり、学生はより多様化してくるので、さらにきめ

細かい履修指導が必要となろう。

#### (B群20) オフィスアワーの制度化の状況

##### 1. 「現状の説明」

個々の教員の多くはオフィスアワーを設けて学生指導に当たっているが、学科全体として制度化はしていない。

##### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

教員に質問や指導を受けたいと思っても、教員を捕まえられないという不満が学生にはあるようである。

##### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

専任教員の当然の任務としてオフィスアワーの義務化が望ましい。

#### (B群21) 留年者に対する教育上の配慮措置の適切性

##### 1. 「現状の説明」

以前に比べると留年生の数もさほど多くはなく、特別の措置はとっていないが、カリキュラムの改変時期に当たった留年生には履修方法などについて特別に配慮している。

##### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

ゼミや卒業論文の単位を修得した学生が留年すると、その後、教員との個別の接点が失われてしまい、学内で孤立化してしまうことがある。

##### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

留年生に教員から積極的に声をかけていくことは当然として、さらに根本的には、留年生の教育上の配慮をする制度を検討すべきである。

#### (教育改善への組織的な取り組み)

#### (A群9) 学生の学習の活性化と教員の教育指導方法の改善を促進するための措置と有効性

##### 1. 「現状の説明」

各教員はそれぞれ教授方法を工夫することで、学生の学修を活性化するように努めている。たとえば授業ごとにメールで、感想・意見・小レポートを出すことを求め、次回の授業時にそれを学生にフィードバックするなどして、双方向的な授業を行っている教員もいる。だがこうした努力は教員個人に任されており、制度的な取り組みにはなっていない。制度的には「基礎演習」の取り組みがある。この「基礎演習」では、指導方法などについて、事前に合意形成するとともに、学生の授業アンケートをもとに翌年の改善点も検討している。また学生としては、クラス代表により学年全体の研究発表会を行い、学生が相互に研鑽できる場を作っている。

##### 2. 「点検・評価 長所と問題点」



「基礎演習」の取り組みはかなり効果を発揮しているが、全体的にはまだ個々の努力の段階であり、より体系的に考慮した措置が必要である。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

学科として教育指導方法の改善を促進する措置が導入されることが望まれる。

## (A群 10) シラバスの作成と活用状況

### 1. 「現状の説明」

『講義要項』には全科目について、授業のテーマ、進め方、到達目標、評価方法などが記されている。また最初の授業で毎回の授業内容について、より細かなシラバスを配布している教員も多い。学生はこれらによって、各科目の概要と授業計画を知ることができる。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

シラバスの作成と活用状況については、概ね、妥当である。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

現在のところでは特になし。

## (A群 11) 学生による授業評価の活用方法

### 1. 「現状の説明」

Semesterごとに、ほとんどの授業科目で学生の授業アンケートによる授業評価が行われており、その結果も一応公開されている。しかし、学部・学科として、それを検討する機会はなく、個々の教員に任されている。また、文学部ではほぼ定期的に学生との協議会が設けられ、学生側から、口頭で授業の評価や改善要望などが寄せられることがある。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

細かな点では、授業評価アンケートの取り方などにも、教員ごとの違いがある。アンケートのとり方、その活用法等を、学科として考えるべきである。また、常時学生の意見や要望を聞いていくことはよい。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

学科の会議などでも、授業評価の結果を報告・検討していきたい。

## (B群 22) F D活動に対する組織的取り組み状況の適切性

### 1. 現状の説明

近年、F Dに関する学内および学外での講演会、研究会が開催され、これに参加が促されている。ただ現在のところ、学科としては意識ある教員の参加にとどまっている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

F D活動に対する意識がまだ学科全体のものとはなっていない。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

時間がかかるであろうが、自主的参加への意識を高めていきたい。

## (授業形態と授業方法の関係)

### (B群 23) 授業形態と授業方法の適切性、妥当性とその教育指導上の有効性

#### 1. 「現状の説明」

社会科学の授業形態としては講義と演習がある。講義は体系的な知識を効率的に教授する方法としては優れているが、程度の差はあれ、一方向的にならざるを得ず、学生は受身の受講態度になりがちである。多人数の授業では、TA（ティーチング・アシスタント）を使ってレポート添削するなどして、双方向的になるように努めている。演習科目には「基礎演習」「基礎文献演習」「社会学演習Ⅰ～Ⅴ」がある。どれも比較的少人数の規模で、学生が主体的に報告・発表したり、議論したりすることができるだけでなく、人間的な触れ合いも可能になり、人間教育の場として有効である。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

演習は学生が積極的に授業参加することが可能であり、人間的ふれあいの場としての効果をもたらしている。ただ、最近はここでも受身的な態度に終始する学生が多くなっているように思われ、学生の積極性を引き出すための工夫が必要になってきている。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

演習について教員間の意見交換をしていく。

### (B群 24) マルチメディアを活用した教育の導入状況とその運用の適切性

#### 1. 「現状の説明」

1年生の「社会学情報処理」では、パソコン等を用いて授業が行われている。またテレビ・ビデオを利用して映像教材を使用した授業が増えており、またプレゼンテーション用の情報機器を使用した授業も、数は多くないが、行われている。電子メールも質疑応答や小レポートの提出手段として利用されている。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

社会科学では新入生にパソコンを推奨し、できるだけ、個々の教員も授業内でパソコンを活用するように努めている。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

講義支援システムなども積極的に利用していきたい。

### (B群 25) 「遠隔授業」による授業科目を単位認定している大学・学部等における、そうした制度措置の運用の適切性

#### 1. 「現状の説明」

とくに行っていない。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

とくになし。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

とくにない。

(C群 24) 4年未満で卒業を認めている大学・学部における、そうした措置制度の運用の適切性

#### 1. 現状の説明

社会学科では、特に優秀な学生には早期卒業を認めており、2003年度に2名、2004年度に1名の学生がこの制度を利用して、3年間で卒業した。

#### 2. 点検・評価 長所と問題点

GPAの数値で成績優秀者を認定しているが、甘すぎるとの声もある。

#### 3. 将来の改善・改革に向けた方策

推移を見たらうで、改善すべき点があれば改善したい。

## 文学部人文学科

### I 大学・学部における主要点検・評価項目

#### 3 学士課程の教育内容・方法等

##### 評価目標

主に哲学と歴史学の学習を通して、人間、社会、歴史に関する広く深い知識を得るとともに、国際的視野をもつ人間、深い探究心をもつ人間を養成することをめざす。

##### 具体的方法

早い時期から専門的学習ができるとともに、同時に広い範囲の学習ができるような学士課程のあり方をもっている。

#### (1) 教育課程等

(学部・学科等の教育課程)

(A群1) 学部・学科等の教育課程と各学部・学科等の理念・目的並びに学校教育法第52条、大学設置基準第19条との関連

##### 1. 「現状の説明」

人文学科では、人間、人類について考察するうえで欠かすことのできない哲学と歴史学を専門的に学ぶ。その専門的教育はある程度の教養の基礎の上に成り立っている。その教養育成のために、共通科目として28単位の習得を義務付けている。そのうち言語科目を8単位選択必修として設置し、そのほかの人文、社会、自然の分野の科目を20単位選択科目として習得するよう指導している。さらに専門的学習のために、狭い意味での哲学・歴史学ばかりではなく、論理学、倫理学、宗教学、民俗学、考古学、さらに地域も日本、東洋、西洋、その中間の中央ユーラシアと、広く学習できるように教育課程を編成している。

この教育課程は、人文学科の理念、すなわち、「人文主義（ヒューマニズム）に基づいた新しい文明を構築することを、哲学と歴史という二つの大きな分野から探求していく」という理念と、人文学科の目的、すなわち「広く国際的視野を持つことができる人間、人文学の分野に探究心を深く持つことができる人間を養成する」という目的とに基づいている。

専門科目は必修科目として、1年次の基礎演習、3、4年次の演習、4年次の卒論研究の18単位が設置されている。その上で重要な科目として、人文学概論、哲学概論、史学概論から8単位選択必修として履修することを義務付けている。さらに歴史、哲学関係の科目から44単位を選択科目として履修し、そのほか学生の関心に応じて、専門科目を含

めて 26 単位を自由選択科目として履修するよう定めて、多様な関心に応じて、幅広く学習できるよう教育過程を定めている。この教育課程は当然学校教育法第 52 条の大学の目的や、大学設置基準第 19 条の教育課程の編成方針に合致している。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

人文学科の教育課程は、主要な研究分野はカバーしていると自負している。哲学の分野では西洋、東洋の哲学の概要や歴史に関する科目を多数設置し、また関連分野の論理学、倫理学、美学、宗教学、ラテン語、サンスクリット語も設置し、歴史の分野では、西洋、東洋、日本の古代から現代までの歴史の科目を設置し、また東西の文化史や史学概論や古文書学、考古学、民俗学などの科目も設置している。このような多数の科目を設置していることはひとつの長所ではあるが、それでも地域ではアフリカ、中南米、オセアニアなどの分野はカバーできず、また少ない学生定員に対して多数の教員を配分することが経営上困難であるため、ある程度非常勤講師に教育を依存しなければならないという問題点がある。もちろん大学設置基準上の教員定数は十分に満たしているが、哲学・歴史の分野は範囲が非常に広いので、学生の多様なニーズに充分対応できるとは言えない。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

人文学科の教員数には限界があるので、他学部の授業科目で、哲学・歴史に関係ある科目を履修しても、それを人文学科の専門科目の自由選択科目として認定しているが、もし学生のニーズがあればさらに拡充する用意がある。また 4 年に一度の教育課程の見直しの時には、学生から意見を聴取して、専門科目の新設改廃を行っているので、できるだけ学生のニーズに合った教育課程を作っていく方針である。

## (A群2) 学部・学科等の理念・目的や教育目標との対応関係における、学士課程としてのカリキュラムの体系的性

### 1. 「現状の説明」

歴史と哲学に関する広範な学習が可能ないようにカリキュラムを体系的に設置している。具体的には学習の基礎となる読書の後でレポートを作成する能力を育成するために、1 年次に基礎演習を必修科目として設置した。それと併せて、歴史と哲学を包括する人文学概論、また史学概論、哲学概論を選択必修科目として設置している。さらに歴史と哲学の専門科目を 1 年次と 2 年次に設置し、自分の関心にあった専門科目を早くから学習できるようにしている。3 年次には歴史と哲学の特殊講義を、また必修科目である演習を 3, 4 年次に設置し、4 年次の卒業研究を集大成とするようにしている。人文学科では卒論研究を重視し、4 年次に十分その時間が取れるように、3 年次までにできるだけ多くの科目を履修できるよう履修制限を半期 26 単位に定めている。また幅広い学問分野を習得することを目的として、他学部聴講科目を 26 単位まで、自由選択科目として認めている。また特定スキルの習得を目的としていないので、3 年次卒業は認めていない。

また、英語必修の制限を 2003 年度のカリキュラム改変によって廃止した。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

広範な学習を推奨するという学科の趣旨に沿って、一部の学生は卒業に必要な単位を大幅に越えて幅広く学習している。また3年次までにできるだけ多くの科目を履修する学生は多い。全体的に他学部聴講科目を履修する学生は少ないようである。また卒業論文の出来不出来に大きな差が見られる。これは3年次後半から始まる就職活動で疲弊した学生が、十分な時間の余裕もなく卒業研究に取り組む、という学生を取り巻く社会的環境によるところが大きい。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

2003年度に行った必修科目の基礎演習の設置と、外国語科目から英語必修の条件を外すという改革は、おおむね学生には好評であるが、それが学生の学習動向にどのような影響を与えるかはまだ不明である。この点について着目しつつ、今後のカリキュラム編成時に生かしていきたい。

### (A群3) 教育課程における基礎教育、倫理性を培う教育の位置づけ

#### 1. 「現状の説明」

人文学科では幅広い学問分野の履修という観点から、共通基礎科目の履修を課している。共通基礎科目の中には哲学・歴史学関係の科目も多く含まれているので、学生にとっては専門科目への入門的な学科として履修するよう指導している。また倫理学関係についても、共通基礎科目にも専門科目にも設置されており、学生に積極的に履修するよう指導している。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

共通基礎科目に専門科目と関連する科目が多い結果、学生の履修状況は良好である。倫理学関係の科目の履修者も多い。しかしその反面、特に自然科学系の共通基礎科目を履修する学生が少ない。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

学生の理科離れは全国的な傾向であるので、特に対策はないが、専門科目の論理学などで多少のカバーができるかもしれない。

### (B群1) 「専攻に係る専門の学芸」を教授するための専門教育的授業科目とその学部・学科等の理念・目的、学問の体系性並びに学校教育法第52条との適合性

#### 1. 「現状の説明」

専門科目として、必修科目18単位、選択必修科目8単位、選択科目44単位の履修を定めている。必修科目として、1年次の基礎演習、3・4年次の演習、4年次の卒論研究の18単位が設置されている。その上で、人文学概論、哲学概論、史学概論から8単位選択必修となっている。

歴史、哲学関係の科目から 44 単位を選択科目として履修し、そのほか学生の関心に応じて、他学部専門科目を含めて 26 単位を自由選択科目として履修できる。専門的学習のために、狭い意味での哲学・歴史学ばかりではなく、広く学習できるように専門科目を設置している。この専門に関する教育課程は、人文学科の理念や目的、さらに学校教育法第 52 条の大学の目的に合致している。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

人文学科の教育課程は、上記の理念、目的を実現するために、主要な研究分野はカバーしている。哲学の分野では西洋、東洋の哲学の概要や歴史に関する科目を多数設置し、また関連分野の論理学、倫理学、美学、宗教学、ラテン語、サンスクリット語も設置し、歴史の分野では、西洋、東洋、日本の古代から現代までの歴史の科目を設置し、また東西の文化史や史学概論や古文書学、考古学、民俗学などの科目も設置している。

ただ哲学・歴史の分野は範囲が非常に広いこともあり、学生の多様なニーズに充分対応できているとは必ずしも言えない。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

他学部の授業科目で、哲学・歴史に関係ある科目を人文学科の専門科目の自由選択科目として認定しているが、もし学生のニーズがあればさらに拡充する用意がある。また 4 年に一度の教育課程の見直しの時には、学生から意見を聴取して、専門科目の新設改廃を行い、できるだけ学生のニーズに合った教育課程を作っていく方針である。

## (B 群 2) 一般教養的授業科目の編成における「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養」するための配慮の適切性

### 1. 「現状の説明」

人文学科ではいわゆる教養育成のために共通科目のうち 20 単位を選択科目として履修することを定めている。共通科目の内容については共通科目関連の部署からの説明がなされるので、ここで再説することはしない。ただ人文学科という学科の特質から、主に歴史と哲学という教養科目を深く、広く学習するので、教養育成に関しては、少なくとも人文分野では問題がないと思われる。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

学生の自発的学習を重視しているので、あまり関心のない分野を強制的に学習させる必要はないと考えている。共通科目は入門的な科目として履修されている。特に高等学校で、倫理や世界史を学ばなかった学生もいるので、それらの学生には学習上効果があると考えられる。問題点としては、共通科目の担当者は兼任教員が多く、その教育内容に関して専任教員が担当する専門科目と重複がある点である。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

共通科目の人文分野に関しては人文学科の専任教員が責任者を務めているので、連絡・調整が可能である。本年より、兼任教員と専任教員との懇談会が十分な時間をもってもつ

こととなり、たがいに情報の交換をしている。

### (B群3) 外国語科目の編成における学部・学科等の理念・目的の実現への配慮と「国際化等の進展に適切に対応するため、外国語能力の育成」のための措置の適切性

#### 1. 「現状の説明」

共通科目において選択必修として8単位以上の外国語の修得を義務づけているが、英語を必修としない。専門科目として、サンスクリット語と西洋古典語(ラテン語)を設置している。古文書を読むための古文書学も事実上外国語教育と同様な位置づけになっている。さらに1年次から英語の外書講読、2年次からフランス語、ドイツ語、中国語の外書講読を設置し、外国語文献の講読のトレーニングをしている。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

英語を必修から外すことには、異論もあった。既に中学、高校と6年間英語を学んできているという現状と、英語を学ぶ機会は数多くあるという社会的状況を踏まえて、英語以外の外国語を学びたいという学生のニーズを優先したが、学生には好評のようである。問題点としては複数の外国語の入門科目だけを習得し、結果として履修した言語の習熟度が低い学生が見られることである。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

現在のカリキュラムは2003年度に導入されたので、その効果や問題点の検証は2007年度のカリキュラム改編で行うことになる。共通科目における外国語の選択にあたっては、ひとつの言語を少なくとも4単位にすることにより、入門科目だけを多数学ぶことによる弊害をなくすことも視野に入っている。

### (B群4) 教育課程の開設授業科目、卒業所要総単位に占める専門教育的授業科目・一般教養的授業科目・外国語科目等の量的配分とその適切性、妥当性

#### 1. 「現状の説明」

専門科目に関しては、別表に記載してあるように、設置科目数は修得必要単位数を大幅に超えて設置してある。卒業所要総単位数は124単位であり、専門科目は必修科目が18単位、選択必修単位が8単位、選択科目が44単位、合計70単位であり、一般教養的授業科目は選択科目として20単位であり、外国語科目は8単位である。

そのほか26単位は、専門科目、教養科目、言語科目、他学部専門科目などを自由選択科目として認めている。他の学科と比べて自由選択科目が多いが、これは学生の関心に基づいて幅広い学習を可能なように教育課程を設定するという人文学科の理念に基づくものである。幅広い知識の獲得を目指すという点では、専門、共通、外国語の各科目の量的バランスは適切であると考えている。



## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

学生の自主的な学問関心を重視して、教育課程を設定するという人文学科の方針は、学生にもおおむね好評である。人文学科の教育課程には現状では特に大きな問題点があるとは考えていない。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

今後さらに、時代の傾向、学生の関心や要請なども考慮し、本学科として適切なカリキュラムを検討していく。

## (B群5) 基礎教育と教養教育の実施・運営のための責任体制の確立とその実践

### 1. 「現状の説明」

歴史と哲学が専門ということもあり、共通科目運営センターの人文科目の責任者を人文学科の専任教員が務めている。また共通科目の歴史、哲学、倫理学、宗教学の科目の担当者の手配を人文学科が行っている。さらに専門科目として基礎演習を1年次に設置して、大学生として必要な読書・レポート・図書館に関する基本的なことを指導している。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

基礎教育、教養教育は大学全体の問題であり、一学科の意志により左右できる問題ではない。人文学科の歴史、哲学自体が広い意味での教養分野であるので、特に学科としては大きな問題点があるとは考えていない。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

人文学科では基礎ゼミを開設したが、今後学生の動向や効果を見て、検討をしていきたい。

## (カリキュラムにおける高・大の接続)

## (A群4) 学生が後期中等教育から高等教育へ円滑に移行するために必要な導入教育の実施状況

### 1. 「現状の説明」

人文学科の学生の中で、高等学校で世界史や倫理社会を学習しなかったものもいるので、そういう学生には人文学科の教員が担当している共通科目の歴史：西洋史、歴史：東洋史、哲学：西洋、哲学：東洋、倫理学、などの履修を勧めている。また1年次の基礎演習で、大学の学習方法、レポートの作成などの指導を行っている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

現在のところ授業に支障ができるほどの後期中等教育とのギャップがあるとは認識していない。今後は週5日制による新教育課程の学生が入学した場合にどうなるかとの懸念はあるが、人文学科としてはそれほど問題があるとは予測していない。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

2003 年度に導入した基礎演習の教育効果を見守っている段階であるが、必要とあらば 2007 年度カリキュラム改編で検討したい。

#### (履修科目の区分)

#### (B 群 7) カリキュラム編成における、必修・選択の量的配分の適切性、妥当性

##### 1. 「現状の説明」

人文学科では必修科目は、専門科目の 1 年次の基礎演習 2 単位、3, 4 年次の演習 8 単位、卒業研究 8 単位の 18 単位である。また選択必修として言語科目 8 単位をどの言語でもよいから選択して履修することを定め、また専門科目では、人文学概論 4 単位、哲学概論 4 単位、史学概論 4 単位の中から 8 単位を履修することを義務づけている。共通科目の選択科目は 20 単位、専門科目の選択科目は 44 単位の履修を義務づけ、そのほか自由選択として 26 単位を、他学部専門科目を含めて認めている。卒業研究、演習を除けば比較的自由度の高いカリキュラムとなっている。

##### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

現状の必修、選択の量的バランスに問題があるとは認識していない。

##### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

特に改善の必要はない。

#### (授業形態と単位の関係)

#### (A 群 5) 各授業科目の特徴・内容や履修形態との関係における、その各々の授業科目の単位計算方法の妥当性

##### 1. 「現状の説明」

言語科目の単位計算方法は共通科目運営センターの方針に従って、週 1 コマ 1 単位となっているが、他の科目は週 1 コマ 2 単位で計算している。これは講義科目も、外書講読などの学科の語学科目も、演習科目も同じ計算方法を採用している。卒業研究のみは特定の授業時間数とは無関係に、自主的な学習として人文学科では重視して、8 単位を認定している。

##### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

言語科目が予習・復習が大変な割には単位計算が不利だという学生の意見は、共通科目運営委員会によって検討されるべきものである。その他の科目に関しては好評のようにある。卒業研究の 8 単位は、現在では妥当な計算方法であると考えている。

##### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

特に大きな問題点があると認識していないので、改革の予定はない。

#### (単位互換、単位認定)

(B群8) 国内外の大学等と単位互換を行っている大学にあつては、実施している単位互換方法の適切性

1. 「現状の説明」

人文学科は特定の他大学との単位互換を行っていない。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

なし。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

なし。

(B群9) 大学以外の教育施設等での学習や入学以前の既修得単位を単位認定している大学・学部等にあつては、実施している単位認定方法の適切性

1. 「現状の説明」

既習得単位は 30 まで認定されている。3 年次編入では、共通科目 32 単位、専門科目 30 単位の計 62 単位が一括認定されている。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

妥当と思われる。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

とくに改善の必要はないと思われる。

(B群10) 卒業所要総単位中、自大学・学部・学科等による認定数の割合

1. 「現状の説明」

人文学科では、卒業総単位数 124 単位の中で、編入生の場合は 62 単位まで認定する。また、留学での単位は最大 60 単位まで認定できる。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

学生の多様な関心に対応するために、自由選択科目を設置しているが、他学部・他学科の専門科目を選択する学生はそれほど多くない。しかし中には工学部の科目を履修するケースなどもあり、制度自体は存続する必要があると考えている。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

特に改革が必要とは認識していない。

(開設授業科目における専・兼比率等)

(B群11) 全授業科目中、専任教員が担当する授業科目とその割合

1. 「現状の説明」

人文学科の専門科目は 2003 年度では 84 科目設置してあるが、人文学科所属の専任教員が担当する科目数は 61 であり、本学の他学部専任教員が担当する数は 6、非常勤講師が

担当する数は11、その他不開講科目数が6である。人文学科専任教員の占める割合は73%であり、本学専任教員が占める割合は全体で80%となっている。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

1988年開設の当初は、専任教員が多かったため、専門科目はほとんど専任教員が担当していたが、その後教員数の削減、不補充のために、兼任教員による専門科目の担当や、不開講が多くなってきた。4年に一度のカリキュラム改編において、そのつど見直している。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

不開講科目が増加するのは好ましくないので、兼任教員を得にくい科目については、思い切って削減するなどの手段により、専任教員による講義科目を80%程度に維持したい。

### (B群12) 兼任教員等の教育課程への関与の状況

#### 1. 「現状の説明」

約20%の科目を兼任教員が担当している。兼任教員の選定、依頼に関しては学科が責任をもって行っている。年度末に次年度の兼任教員と学科コーディネーターとの会議があり、兼任教員からの要望などを伺っている。また成績評価などのことについても相互に意見を交わしている。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

現状では特に大きな問題はない。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

特になし。

### (生涯学習への対応)

### (B群13) 生涯学習への対応とそのための措置の適切性

#### 1. 「現状の説明」

社会人入学制度により社会人が編入学することがあるが、特に配慮はしていない。生涯学習への対応としては大学の夏季大学講座において人文学科の教員も授業を担当している。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

特に問題点を見出していない。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

特になし。

### (正課外教育)、(2) 教育方法等、(教育効果の測定)

### (B群14) 教育上の効果を測定するための方法の適切性

#### 1. 「現状の説明」

一般的な講義科目の効果測定の方法としては、試験・レポートなどが採用されている。外書講読・古文書学・サンスクリット語・演習などは、日常的に学生に担当させたり、小テストを行ったりして、学生の習熟度を判断しながら、授業を進めている。卒業論文は主査・副査に専任教員がつき、個別に口頭試験を実施している。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

受講者が少人数の科目であれば、質問、ディスカッションなどの手法を取り入れた教育効果の測定も可能であるが、多くの講義科目が50～250名程度の受講者がいるために、きめ細かな教育やその効果測定も困難な状況である。伝統的なペーパーによる試験やレポートで成績を評価するのはやむをえないと考えている。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

一部の授業には大学院生によるTAや学部学生によるSAが配置され、レポートの整理などの授業補助に使えるようになったので、小テストやレポートをよりきめ細かく実施するようにしたい。

# (B群 15) 教育効果や目標達成度及びそれらの測定方法に対する教員間の合意の確立状況

## 1. 「現状の説明」

学生にある程度の到達目標を示し到達度に応じた評価を与えるという絶対評価は、学生の学習意欲を刺激する上で重要な要素であると考えている。成績評価は、各教員の責任において絶対評価をしている。半期ごとの講義アンケートや科目別成績一覧表などを参考に教員の成績評価が著しくアンバランスにならないように配慮することを学科会議で申し合わせている。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

成績評価の基準をAにするのかBにするのかという点に関しては、学科としてはBを基準とするという方向性ではあるが、科目の性質によっては、例えば演習や外書講読のように出席者の多くが熱心に受講している場合は、Aの割合が増えるなどの特殊事情があるため、相対評価を導入することには慎重である。多人数の受講者のいる講義科目に関しては、成績の平均点に大きな違いは少なくなっている。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

到達度、習熟度を評価する絶対評価を否定して、学生全体の中で成績評価の割合を制限する相対評価を積極的に主張する意見は人文学科には無い。科目別成績一覧表の点検が現状で進めば、成績評価が著しくアンバランスになることはないと考えている。

# (B群 16) 教育効果を測定するシステム全体の機能的有効性を検証する仕組みの導入状況

## 1. 「現状の説明」

教員は著しく成績評価がアンバランスにならないようにすることが求められている。しかし、現在はそれぞれの教科の目標に応じて到達度を評価する絶対評価をしている。また、優秀な卒業論文に関しては雑誌『フォーラム人文』に掲載して顕彰している。卒業論文は資料室に10年間保存し、後輩の学生が閲覧することが可能であり、卒業論文執筆に緊張感を持たせている。人文学科の科目で授業公開されているものもあり、授業アンケートなどにより、より効果的な授業ができるよう配慮している。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

授業改善を一つの目的としている授業アンケートは、各教員が授業運営の参考に使っている。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

科目別成績一覧表や授業アンケートの継続、授業公開などの活動を継続する以外の方策を特に考えてはいない。

## (B群17) 卒業生の進路状況

### 1. 「現状の説明」

人文学科で学ぶことが、特定の職業に不可欠であるということはないので、進路に関しては、大学院進学以外は、大学のキャリアセンターに全面的に任せている。

卒業生の大部分は広告、食品、流通、アパレルなどの一般企業に就職するが、毎年大学院進学者も若干名いる。また小学校教員免許取得のため通信教育部に通い教員採用試験の準備をする者もいる。また卒業後特定スキルの習得のために専門学校に進む者もいる。

現実には3年次後期から就職活動を始め、4年前期で就職内定を得る学生は半数にも満たない。卒業論文提出後に再び就職活動をして、約1割の学生は進路未定のまま卒業している。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

進路に関してはゼミ単位で担当教員が演習時にアドバイスし、またキャリアセンターなどを通じて学生が積極的に就職活動をしている。学生の就職状況が厳しい中で、比較的健闘しているという印象を持っている。4年前期の演習の授業が就職活動などで成り立たないという状況が一部に見られるが、これもやむをえない側面があると思われる。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

大学全体としてはキャリアセンターの強化の方向であるので、人文学科としては、連絡を密にしていきたいと考えている。

## (厳格な成績評価の仕組み)

## (A群6) 履修科目登録の上限設定とその運用の適切性

### 1. 「現状の説明」

人文学科は各学期の履修上限を26単位に設定している。これにより3年次終了までに、

4年次の演習と卒業研究を除いて卒業必要単位を修得可能にしている。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

人文学科は卒業研究を重視しているため、3年次までにできるだけ多くの単位を取ることを学生に勧めているので、この程度の履修制限が適切であると考えている。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

現状では特に問題があるとは考えていないが、2007年度の文学部改組により、専修決定が1年次終了時になれば、専門科目の学年配当の次第によっては、4年次履修科目が植えるかもしれないことを危惧している。

### (A群7) 成績評価法、成績評価基準の適切性

#### 1. 「現状の説明」

試験・レポート・通常授業での発表などを考慮し、まだ出席を厳格に採ることにより、学生の学習意欲を評価し、総合的に成績を評価している。成績評価の基準はBを標準とするようにはしているが、科目の特性により多少のバラツキはやむをえない。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

科目別成績一覧表で見ても、成績評価に著しいアンバランスがあるとは思われない。各教科の特殊性を考慮して、担当教員が適切な評価をしていると考えている。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

現状では特に大きな問題点は無いと考えているので、改革は考えていない。

### (厳格な成績評価の仕組み)

#### (B群18) 厳格な成績評価を行う仕組みの導入状況

#### 1. 「現状の説明」

担当科目の特性に応じた成績評価が必要であり、相対評価のような画一的な成績評価システムを導入することには疑問が多いと考えている。成績を教員が教務課に提出したあとでは、訂正を厳しく制限しているので、その点では厳格である。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

現状の科目別成績評価一覧表や授業アンケートなどによって、成績評価の妥当性を各教員が自分で判断し、適正化していくという方向でよいと思われる。ただ卒業生が数単位の不足のために卒業延期になるという現状が、このまま救済措置なしでいいのかという意見もある。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

人文学科としては、特におおきな改革を必要としているとは認識していない。

### (B群19) 各年次および卒業時の学生の質を検証・確保するための方途の適切

## 性

### 1. 「現状の説明」

学期ごとに成績評価をし、学生並びに保護者に通知しており、成績不良者に対しては面接をして一層の努力を促している。特に進級時に成績による関門制度は大学全体と異なるものは採用していない。卒業生に関しては卒論執筆を義務化して、一定の質を保つようにしている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

不登校、病気などによる成績不良者は若干存在するが、人文学科の学生の質の維持・向上に関しては、それほど大きな問題があるとは認識していない。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

特に改革を必要としてはいないと考えている。

## (履修指導)

### (A群8) 学生に対する履修指導の適切性

#### 1. 「現状の説明」

前期と後期の冒頭に、1年次生、2年次生を対象に履修のためのガイダンスを行っている。また2年次の後期には演習のガイダンスを行っている。また、3、4年次生に対してはゼミの教員を通して履修指導を行っている。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

特に問題点はないと考えている。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

特に改善すべき点はないと考えている。

### (B群20) オフィスアワーの制度化の状況

#### 1. 「現状の説明」

すべての教員がオフィスアワーを設けているわけではない。学生はオフィスアワー以外にも各教員の研究室に来ているので、設定することにはあまり意味がないという声もある。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

オフィスアワーを設定していても、その時間帯に授業を受けている学生もいるので、学生は適当な時間帯に研究室を訪問している。研究室に確実に在室していることを示すという程度の役割しか果たしていない。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

それほど大きな学科でないので、オフィスアワーを厳格に制度化する必要はそれほどないと思われる。

### (B群21) 留年者に対する教育上の配慮措置の適切性



### 1. 「現状の説明」

留年者に対する特別の配慮はしていないが、ゼミ等を通じて留年者への指導を行っている。ただ4年間在籍して一定程度の単位数を取得していない場合は強制退学になるので、その恐れのある学生に対しては、学生本人や家族に勉学に集中できない理由などを、クラス担任やコーディネーターが電話などで問い合わせたりしている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

留年には経済的事情や病気などのさまざまな理由があり、画一的な対応をとりにくいので、現行の対応策で大きな不都合があるとは考えていない。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

特に改善を必要とするとは考えていない。

## (教育改善への組織的な取り組み)

### (A群9) 学生の学習の活性化と教員の教育指導方法の改善を促進するための措置と有効性

#### 1. 「現状の説明」

授業アンケートを参考にして各教員が授業の改善に取り組んでいる。また年に数回学生代表と学科コーディネーターが意見交換して授業の活性化について検討している。学生からの要望として1年次に学習方法の基礎を教えて欲しいという要望があったので、2003年度のカリキュラム改編で基礎演習を設置した。授業によってはビデオやスライドなどを使用して、視覚に訴える授業も行っている。大学のインターネット授業システムを利用して、学生への教材配布や、復習用資料の提供なども行っている。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

基礎演習は1クラスを20人程度にし、またSA制度による上級生の授業補助を優先的に配置するなどして、大学の学習面での戸惑いを少なくするようにしている。授業アンケートや学生との学科協議会を通じた学生の授業改善要望に対しては、各教員が真摯に対応している。ただパワーポイントを使用した授業ができる環境にない教室が多いため、授業の活性化にもある程度の制限がある。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

大きな予算措置を伴わない教育改善にはこれまでも取り組んできたし、教育機器の配備も少しずつ進んでいる。今後もこの方向性を推進していきたい。

## (A群10) シラバスの作成と活用状況

#### 1. 「現状の説明」

シラバスは大学の方針によって大学のインターネット教育システムに掲載されており、教員はできるだけシラバスからそれないように授業を行っている。シラバスには授業の到達目標や成績評価の方法、またそれぞれの授業の内容などが掲載されている。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

シラバスによりある程度授業内容が把握できるようになっているので、学生の履修には便利になった。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

シラバスにどのような情報を掲載するかについては、学生の意見を聞きながら今後も検討していきたい。

### (A群 11) 学生による授業評価の活用方法

#### 1. 「現状の説明」

学生による授業アンケートは数値化される部分と、記述式の部分とがあり、公表されているのは、数値化されている部分だけである。記述式の部分には、学生からの多様な意見が書かれており、教員はその部分を読んで、授業改善に取り組むことも多い。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

授業アンケートに記載された事項に関しては、教員もできるだけ真摯に対応していると思われる。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

今後もさまざまなチャンネルを通じて学生の意見を吸収して授業改善に役立てたい。

### (B群 22) FD活動に対する組織的取り組み状況の適切性

#### 1. 現状の説明

学科として、基礎演習などは、担当教員ならびにコーディネーターが互に教材や指導方法について随時検討している。全学的には、公開授業の開催や、その授業に参加してから検討会を行うなどのFD活動を推進しており、学科の教員もこれに参加するようにしている。また多くの科目で授業の公開を行っている。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

FD活動を推進して授業改善をしなければならないという意識はあまり強くなく、結果的に学科全体としてFD活動はそれほど活発ではない。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

人文系の学問は伝統的な要素も多く、その点は大切にしたいと思うが、さらに学生のためによりよき改善をしていきたい。

### (授業形態と授業方法の関係)

#### (B群 23) 授業形態と授業方法の適切性、妥当性とその教育指導上の有効性

##### 1. 「現状の説明」

人文学科の授業が主として行われるC棟では、教室にパソコンやオーディオ機器が不足している。またスライドスクリーン、テレビ受像機も教室備え付けではないため、授業の

たびに当該教室に運ばなければならない状況である。そのためわかりやすいヴィジュアル機器を使用しての授業が困難であった。しかし各階ごとに備え付けられたので、エレベーターを使用して、移動しなければならないという不便さは解消された。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

まだパワーポイントを使用して、プロジェクターでプレゼンテーションできる環境にはないが、徐々に環境整備が進められていると理解している。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

大きな予算措置を伴う側面もあるので、徐々に改善していくことを期待したい。

### (B群 24) マルチメディアを活用した教育の導入状況とその運用の適切性

#### 1. 「現状の説明」

人文学科では学生全員にパソコン購入を義務付けていないし、また授業をうける学生全員がパソコンを使用できる教室環境はまだできていない。そのためインターネットを通じた教材配布もできない状態である。またその他の機器に関しても不足しているので、伝統的な教科書や板書を使用しての授業を採らざるを得ない状況である。ただ図書館のパソコンは比較的自由に使用できるので、大学のインターネット教育システムにシラバスや教材を掲載して常時アクセスできるようにはしている。またネットを使用して学生からの質問に対応している教員もいる。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

3年次のゼミ生はほとんどがパソコンを所有して、レポート作成などをしているので、それなりの環境は整備されていると思われる。教材のダウンロードなど便利な点もあるが、授業内容によっては利用方法に工夫が必要であると思われる。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

人文学科におけるマルチメディアの使用は一部の物好きな教員が行っているに過ぎないが、その有効な利用方法があれば、積極的に利用していきたい。

### (B群 25) 「遠隔授業」による授業科目を単位認定している大学・学部等における、そうした制度措置の運用の適切性

#### 1. 「現状の説明」

人文学科ではそのような授業を単位認定していない。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

大学全体で対応するなら考慮する。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

当面予定なし。

## 文学部日本語日本文学科

### I 大学・学部における主要点検・評価項目

#### 3 学士課程の教育内容・方法等

##### 評価目標

日本語・日本文学を核とした、幅広い教養ある人材を育成する。

##### 具体的方法

学士課程の専門教育を通して、日本語・日本文学に関する深い知識を養成する。

#### (1) 教育課程等

(学部・学科等の教育課程)

(A群1) 学部・学科等の教育課程と各学部・学科等の理念・目的並びに学校教育法第52条、大学設置基準第19条との関連

##### 1. 「現状の説明」

日本語日本文学科は、日本語日本文学を中心とした、幅広い知識を授けるとともに、国際化時代における日本言語文化の優れた担い手を育成することを目指している。言語や文学をより深く理解するためには、歴史・風土・文化全体についても幅広く学ぶことが必要になる。基礎的領域としては、共通科目を言語科目8単位、言語以外の科目20単位を修得することとしている。また、本学科の専門科目(計76単位を修得)では、日本語学、日本文学の両分野ともに、「概論」「歴史」「各論」「演習」に4区分し、それぞれ適切な科目を配置している。

##### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

日本語・日本文学の両分野を基礎から上級へと履修することにより、各分野の専門性の上に立ち、幅広い知識を授けていると考える。総じて「学校教育法」第52条ならびに、「大学設置基準」第19条を踏まえた教育課程や理念にかなっていると考える。

##### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

両分野にわたり、今後も上記の視点から維持していきたいと考えている。現在でいえば、近代文学の専任教員が在籍しておらず、早急に確保する必要があるということがあげられる。

(A群2) 学部・学科等の理念・目的や教育目標との対応関係における、学士課程としてのカリキュラムの体系性

##### 1. 「現状の説明」

本学科のカリキュラムは、将来、日本語・日本文学の研究と教育に携わる学生や外国人

の学生、帰国学生の勉学をも考慮し、言語・文学各分野の「概論」や「歴史」および基礎的な演習科目を低学年で履修し、学年が進むにつれて、各分野に応じた科目や「演習」などの、より密度の高い学習ができるように配慮されている。

「概論」はそれぞれの分野の基礎知識を身につけるための科目であり、必修科目としては「日本語学概論」「日本文学概論」（ともに1年次）がある。「歴史」では「日本語史」「日本文学史」（ともに2年次）を必修としている。また、「各論」は、概論や歴史で得た知識を基礎として、特定分野を深く研究するための科目である。「演習」（3, 4年次）は小グループで研究調査し討議を重ね、最終的に学習の成果を卒業論文につなげていく。そのほかに、「日本語教育法」「異文化コミュニケーション」などの日本語教育関係科目を置き、日本語教師を目指す学生に対応するようにしている。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

分野的にも広く、基礎的・全体的科目を低学年次に配し、専門的な科目や演習の科目を中・高学年次に配置していて、おおむね本学科の教育目標と対応した体系性を具えたものとする。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

大きく変更する必要を認めないが、今後の学生や社会の要請に応じた変更ができるよう準備しておく必要がある。

# (A群3) 教育課程における基礎教育、倫理性を培う教育の位置づけ

## 1. 「現状の説明」

本学全体としての共通科目には、基礎教育的な内容のものと、少人数で倫理性を培う意義をもった科目がある。これらの中から28単位を履修するように指定している。学科の基礎教育としては「概論」を置いて大学教育への導入としている。すなわち1年次必修科目として「日本語学概論」「日本文学概論」、1年次選択科目に「日本語教育概論」を置いている。また、本学科では毎年新入生研修などを行うことにより、各教員・友人と接触する場を早くから設け、各人が規律ある生活を営めるよう指導している。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

基礎教育面はかなりの広領域にわたるので、学生ははじめは戸惑いを見せるが、総体的には適切な履修となっていると考える。また、新入生研修を行うことにより、新入生が学科に早くとけ込める機会を設けていることは、規律ある学生生活を営む力を養成する点において有益である。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

現在は「概論」を1年次におき、学科として基礎教育分野をみているが、今後は必要性を検討し、1年次に「基礎演習」に類する科目を設けて、より少ない人数の教育を行うことも視野に入れていきたい。

(B群1)「専攻に係る専門の学芸」を教授するための専門教育的授業科目とその学部・学科等の理念・目的、学問の体系性並びに学校教育法第52条との適合性

1. 「現状の説明」

日本語日本文学科は、専門の学芸として、日本語・日本文学に関わる学芸を修めることを目標としている。それは、国際化の時代にあって、ますます必要とされる自国の言語・文化の優れた担い手を育成しようとするものである。また、日本語教師を目指す者のために、日本語教育分野の科目を用意している。

日本語、日本文学については、理念、目的が反映し、学問的体系性が確保されるよう考慮して、科目群を「概論」「歴史」「各論」「演習」と4種に分け、それぞれの科目群を配置している。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

現代の社会情勢や時代とも適合する学芸を教授していると考え。したがって「広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授」という学校教育法52条にかなうものと考え。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

当面改善の必要はないと考えているが、常に時代の状況の中で吟味し続けなくてはならない。

(B群2)一般教養的授業科目の編成における「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養」するための配慮の適切性

1. 「現状の説明」

「共通科目」として24単位、また「自由選目」として20単位の科目を履修できる制度を設け、幅広い教養や総合的な判断力、また豊かな人間性の涵養に資するべく配慮している。共通科目24単位のうち、言語科目は8単位を選択必修、その他の科目を16単位選択としている。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

本学科では豊富な専門科目の履修という点を重視していることから、専門科目単位が80単位となっている。したがって「共通科目」の24単位が多いとは言えない。そうした点が、妥当かどうか検討すべき課題である。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

専門科目とのバランスや、社会の要請とのかねあいを考慮しつつ、全体的視野のなかで「共通科目」の単位数をはじめ検討していくようにしたい。

(B群3)外国語科目の編成における学部・学科等の理念・目的の実現への配慮と「国際化等の進展に適切に対応するため、外国語能力の育成」の

## ための措置の適切性

### 1. 「現状の説明」

外国語科目は共通科目として履修するが、本学科では一つの外国語に偏らない、多様な外国語科目を履修できるように配慮している。言語系科目は選択必修として8単位とし、その内訳は1ヶ国語でも複数言語での習得でもよいとしている。これは、とりわけ語学としての日本語や日本語教育において、言語学と並んで、外国語についての幅広い知識はかなり重要であり、なるべく多くの言語に触れてもらいたいとの考えからである。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

多くの外国語が履修可能な点は優れているが、その反面、特定の外国語の能力が必ずしも伸びないという面をもつ。この点をどう考えたらよいか。現在のところは学生の自由にゆだねられているが、それが必ずしもベストではないということも確かである。一つは、学生個人々の特性や目的にかなった形の履修を促す必要があり、また、ある程度高度な段階まで伸ばすための制度的な検討が必要であろう。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

外国語ならびに古典語（古文・漢文）を含めた（現代日本語以外の）言語の履修について現状を分析し、その適切性を総合的に検討していきたい。また、特定の外国語能力を高めるための改善策を設けるかどうかを検討していく。

## （B群4）教育課程の開設授業科目、卒業所要総単位に占める専門教育的授業科目・一般教養的授業科目・外国語科目等の量的配分とその適切性、妥当性

### 1. 「現状の説明」

専門科目は70科目を開設している。専門科目は必修科目と選択科目に2分されている。そのうち、必修科目は13科目28単位であり、選択科目は開設57科目から52単位を修得する。卒業に必要な124単位のうち、専門教育的授業科目は80単位、一般教養的科目は16単位、外国語科目は8単位、自由選択（共通科目、専門科目ともに選択が可能）が20単位となっている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

全体のバランスはほぼ妥当であると考えているが、あえていえば、専門科目の比重がやや重い場合、相対的に外国語科目の比重が軽くなっている点が問題だともいえる。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

専門科目の比重を現状のまま妥当だとするかどうか、また外国語科目の履修を現在よりも増やすかどうかについて、現状の分析と評価および全体のバランスを考えて検討を行っていく。

## （B群5）基礎教育と教養教育の実施・運営のための責任体制の確立とその実

## 践

### 1. 「現状の説明」

本学科では「概論」科目を基礎教育の中心とし、日本語・日本文学の若干の科目を基礎的なものと位置づけている。これらの基礎教育科目について、学科の教員は重視し、学科の会議等で検討している。また、教養教育は主として共通科目が担っているが、学科教員はこれらの教養教育にも積極的に関わっている。学部の委員を通して、共通科目運営センターへの意見、要望を表している。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

基礎教育にはできれば学科教員全員が関わることを望ましいと考える。現在、学科の教員全体が関わる科目が開設されておらず、そうした点に改善の余地がある。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

いかなる科目が基礎教育にふさわしいかを検討し、学科の教員全体が関わる科目の設置を検討する。

(カリキュラムにおける高・大の接続)

(A群4) 学生が後期中等教育から高等教育へ円滑に移行するために必要な導入教育の実施状況

### 1. 「現状の説明」

新入生研修会を開催し、大学での学習・生活についての心構えや、大学の学問としての特徴をレクチャーしている。学科のカリキュラムとしては「概論」科目を1年次に、「歴史」科目を2年次に、また、「古典語文法」などの高校教育の延長と位置づけられる科目を1年次に配当したり、プレゼミ的な演習を2年次に開設したりしている。これらの科目配当により、後期中等教育から高等教育への移行がスムーズになされるよう配慮している。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

学問や生活についての指導を行ったり、教育課程においても「概論」、「歴史」科目等を低学年次に設置するなど、一定の配慮を行っていると考えられる。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

よりきめ細かい導入教育の一環として、1年次で基礎演習的な科目を配当することなどが考えられる。

(履修科目の区分)

(B群7) カリキュラム編成における、必修・選択の量的配分の適切性、妥当性

### 1. 「現状の説明」

「共通科目」24単位(選択必修8単位、選択16単位)、「専門科目」80単位(必修28単位、選択52単位)、「自由選択科目」20単位。



2. 「点検・評価 長所と問題点」

全体のバランスは妥当であると考え、専門科目の比重がやや高い点が問題点とも言える。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

専門科目の比重を現状のまま妥当かどうか、改善のための検討を行う。

(授業形態と単位の関係)

(A群5) 各授業科目の特徴・内容や履修形態との関係における、その各々の授業科目の単位計算方法の妥当性

1. 「現状の説明」

「卒業論文」が4単位の外は、全ての科目を1 Semester 2単位の科目としている。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

講義は当然であるが、演習科目とも2単目に相当する教育内容を備えているので、妥当な単位計算になっていると考える。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

現段階では、特に改善すべき必要を認めることができない。

(単位互換、単位認定)

(B群8) 国内外の大学等と単位互換を行っている大学にあつては、実施している単位互換方法の適切性

1. 「現状の説明」

全学的に統一されているが、学生が留学した場合、交換・推薦および私費留学の種類に関わらず、申請により60単位まで単位が認定される。ただ、実際にはそれほど多くの単位を認定した例はない。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

現行の認定の制度はおおむね妥当である。学科としても特に問題はない。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

今後必要に応じて検討していく。

(B群9) 大学以外の教育施設等での学習や入学以前の既修得単位を単位認定している大学・学部等にあつては、実施している単位認定方法の適切性

1. 「現状の説明」

既修得単位は30まで認定されている。3年次編入では、共通科目32単位、専門科目30単位の計62単位が一括認定されている。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

現在、特に問題はない。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

今後、必要に応じて検討したい。

(B群 10) 卒業所要総単位中、自大学・学部・学科等による認定数の割合

1. 「現状の説明」

3年次編入学の場合(一般編入、創価女子短期大学からの編入)は最大62単位まで認定することができる。留学における認定は60単位までである。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

現在の単位の認定はおおむね妥当である。したがって特に問題はないと考えているが、1,2年次における、学科で開設している専門科目を履修してほしいという希望もある。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

今後、具体的な問題があれば検討していきたい。

(開設授業科目における専・兼比率等)

(B群 11) 全授業科目中、専任教員が担当する授業科目とその割合

1. 「現状の説明」

演習を除いて開講されている専門科目54のうち、5名の専任教員が担当している科目は29科目であり、比率は54%である(2004年度)。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

専任の担当比率54%はそれほど高い数値ではない。やはり、専門科目について、専任の教員がなるべく多く担当することが、教育面からも望ましい。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

現在の専任教員のコマ数の単純な増加ということには限界がある。したがって、専任教員の新規採用によって、専任の担当比率を高めていく必要がある。

(B群 12) 兼任教員等の教育課程への関与の状況

1. 「現状の説明」

兼任教員4名が講義・演習を担当している。2004年度専門科目開講数54(演習を除く)のうち、14科目を兼任教員が担当している。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

必修科目を含めて、兼任教員が多くの授業科目を担当していることから、この点はぜひ改善する必要があると考える。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

必修科目については、新しい専任教員を確保するなどして、専任教員が担当できる体制を整える必要がある。

(生涯学習への対応)

(B群 13) 生涯学習への対応とそのための措置の適切性

1. 「現状の説明」

通信教育部の科目担当や、大学が開設している夏季大学講座の講師をつとめたり、各教員が学外のような団体が主催する講演会に講師として参加している。社会人編入学を若干名認めているが、これは大学全体と同様であり、学科として特別に社会人に対して配慮する体制をもっているということはない。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

現状では特に問題はないと考える。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

今後、状況に応じて対応を検討したい。

(教育効果の測定)

(B群 14) 教育上の効果を測定するための方法の適切性

1. 「現状の説明」

各授業科目の目的に応じて、 Semesterごとの定期試験（試験レポートを含む）、小テスト、平常点などを組み合わせて評価を行っている。また、現在はGPAによって、学生の成績評価の動向をある程度客観的に把握できる。その他、1999年度より授業アンケートを行っている。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

GPA測定および授業アンケートについては、まだ導入してあまり時間がたたず、その効果測定については経年的な積み重ねが必要である。総じては、現行の方法で適切であると考えられる。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

当面は、現状のままでよいと考えているが、GPAおよび授業アンケートについて、その利用方法について今後検討をしていきたい。

(B群 15) 教育効果や目標達成度及びそれらの測定方法に対する教員間の合意の確立状況

1. 「現状の説明」

学生の授業達成度をGPAで測定し、その数値が特待生の選任などで活用されることを、教員全員が理解している。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

教員がGPAを学生の達成尺度として採用することを理解していることによって、各教員の評価に極端な成績の偏りが生じないよう、自主的に判断している。成績の相対評価は取

り入れていないが、特に問題は起こっていない。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

今後、問題が起こった場合は検討する。

## (B群 16) 教育効果を測定するシステム全体の機能的有効性を検証する仕組みの導入状況

### 1. 「現状の説明」

大学の教務委員会等の取り組み以外に、学科独自で行っている取り組みはない。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

現状では特に問題はないと考える。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

単独に学科で改善・改革していくことは不可能な問題でもあるので、全学的な取り組みに積極的に参加していくことが重要と考える。ただ、今後、学科としての問題が起こった場合は検討していく。

## (B群 17) 卒業生の進路状況

### 1. 「現状の説明」

一般企業、大学院、教員（中学・高校・小学校）、日本語教師などさまざまである。一般企業ではサービス業を中心として、卸売、小売など、また運輸通信等の流通業、金融業など、概して人との関わりの多い職種があげられる。本学科では国語の中高免許状が取得できるが、小中高合わせて教員になるのは卒業生の15%から20%である。また、国際交流について関心が高く、本学科でもマカオ大学に学生を派遣し、日本語の補助教員として日本語を教えるというインターン制度をもっている。こうしたことが機縁となり、国際的に活躍する卒業生も次第に増えている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

教員や日本語教師は、健闘していると言える。しかし就職しない者や教職浪人などもあり、その点で問題があるともいえる。本学科は女性が多数ということも関係なしとはいえないが、やはり就職についての意識をさらに強くもつ必要がある。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

専門性（日本語・日本文学）を生かせる職業は当然のこととして、多様な人材を輩出できるように検討していきたい。また、就職についての意識を高めていきたい。

## (厳格な成績評価の仕組み)

## (A群 6) 履修科目登録の上限設定とその運用の適切性

### 1. 「現状の説明」

本学科では、早期卒業制度を導入したので、各セメスターの上限を20単位、下限を16

単位と定めている。Semesterの GPA が 3.3 以上の場合は、追加単位として次のSemesterに 4 単位分が加えられる。早期卒業を認める対象者の選考を、第 2 Semester 終了時および第 4 Semester 終了時の 2 回としている

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

上限 20 単位とは、10 科目である。週 5 日の授業日では、1 日 2 科目となり、集中的学習という面からも適切と考える。早期卒業制度が採用されてまもなく、まだ対象者はいない。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

当面推移を注視しており、早期に変更すべき状況にはないと考える。

### (A 群 7) 成績評価法、成績評価基準の適切性

#### 1. 「現状の説明」

成績評価は、専門科目すべてが ABC 評価を採用しており、各科目担当者が評価するが、相対的評価はまだ制度的にはとり入れていない。採点基準は 90 点以上は A、80 点～89 点が B、70 点～79 点が C、60 点～69 点が D、59 点以下は D(不合格) となっている。また、他の理由で採点不可の場合は N となる。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

各科目とも、大きな成績の偏りがなく、成績評価は適切に成されていると思われる。学生が成績に異議を申し立てる機会・制度も設けており、最終の成績評価は慎重に成されている。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

大学全体でも今後、成績評価の全体的な結果を公開する方向にあり、そうした公開によっても、さらに適切な評価を行う環境が整いつつある。

### (厳格な成績評価の仕組み)

#### (B 群 18) 厳格な成績評価を行う仕組みの導入状況

#### 1. 「現状の説明」

全学的に三分の二の出席が定期試験の受験要件となっており、また現行の試験点数と評価の関係は、採点基準は全学統一の基準で行われる。全学で行っていること以外に、学科独自で取り組んでいる特別な仕組みはない。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

現状で特に問題はない。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

今後、問題が起こった場合には検討する。

#### (B 群 19) 各年次および卒業時の学生の質を検証・確保するための方途の適切

## 性

### 1. 「現状の説明」

特待生の選考や早期卒業対象者選考、学科主席選考、卒業論文の執筆等により、学生の質を検証している。成績下位者の質の検証と向上については、各科目やゼミ等を通しての指導を行っている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

現状では適切な方途であると考ええる。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

将来、問題が起こった場合には検討する。

## (履修指導)

### (A群8) 学生に対する履修指導の適切性

#### 1. 「現状の説明」

推薦入学者を中心に大学入学以前から指導を行っている。大学入学後は、「履修要項」においてガイドラインを示し、新入生研修会等で履修指導も行っている。また、2年次には、学科ガイダンスや演習ガイダンスを行っている。3・4年次生には、演習の授業を通して常に履修指導を行っている。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

各学年とも履修指導は十分に行われていると考える。現在、教務関係の情報や手続きが学内のWebを通してなされるようになりつつあり、この点の対応にそなえる必要がある。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

多様な学生に対し、一人ひとりの状況や特性も考慮した適切な履修指導を追求していきたい。また、Webの利用についても大学側の総合情報センターと連携をし、価値的な活用を図っていきたい。

### (B群20) オフィスアワーの制度化の状況

#### 1. 「現状の説明」

全ての教員がオフィスアワーを設けている。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

多くの学生がオフィスアワーを行っていることを知らず、指定の曜日・時間以外に来室することが多い。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

教員側の改善の必要は薄いと考えるが、学生の側にオフィスアワーの周知と活用を促す必要がある。

### (B群21) 留年者に対する教育上の配慮措置の適切性

1. 「現状の説明」  
留年者に対する特別な措置は講じていない。
2. 「点検・評価 長所と問題点」  
現状ではさほど問題はないと考える。
3. 「将来の改善・改革に向けた方策」  
今後問題が起こったら考えていく。

#### (教育改善への組織的な取り組み)

##### (A群9) 学生の学習の活性化と教員の教育指導方法の改善を促進するための措置と有効性

1. 「現状の説明」  
日本語日本文学会を組織して講演会を実施したり、卒業論文の中間発表を行うなど、多様な学問に触れる機会を増やして、学生の学習の活性化に努めている。また、全学のファカルティ・デベロップメントの取り組みを活用して、各教員が教育指導方法の改善に努めている。
2. 「点検・評価 長所と問題点」  
講演会や卒業論文の中間発表は、日頃の教育課程では得られない学習の活性化を促しており、今後も継続したい。また、ファカルティ・デベロップメントの取り組みに対し、学科の全ての教員が参加できていない面もある。
3. 「将来の改善・改革に向けた方策」  
さまざまな機会を通して学生の学習の活性化を促し、教員の教育指導方法の改善にも力を傾けていきたい。

##### (A群10) シラバスの作成と活用状況

1. 「現状の説明」  
全ての教員の「講義要項」が大学のホームページで閲覧できる状態にある。それにしたがったシラバスの作成も整いつつある。
2. 「点検・評価 長所と問題点」  
演習など一部の授業では、シラバスを作っても教育効果が得られない場合もあるが、講義科目を中心に、各科目の目的にしたがったシラバス作成が望まれる。
3. 「将来の改善・改革に向けた方策」  
シラバス作成により教育効果の得られる科目では、シラバスを作成することをさらに推進していきたい。

##### (A群11) 学生による授業評価の活用方法

1. 「現状の説明」

非常勤教員の担当科目を含めて、ほぼ全ての科目で授業アンケートが実施されている。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

数量的分析結果については、まだ十分に活用できていない面もあるが、各学生の意見を吸い上げる場としては十分に機能している。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

数量的分析結果の活用法などを含めて、授業アンケートのさまざまな活用法を検討していきたい。

### (B群 22) F D活動に対する組織的取り組み状況の適切性

#### 1. 現状の説明

「教育学習活動支援センター」等が行っている取り組みに参加している。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

個々人については、時間的制約などのため、F D活動に十分参加できない面がある。今後、積極的なF Dへの取り組みが望ましい。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

F D活動の趣旨からいっても、自主性を重んじ、強制にならないように配慮しつつも、活発になる方策を考えていきたい。

### (授業形態と授業方法の関係)

### (B群 23) 授業形態と授業方法の適切性、妥当性とその教育指導上の有効性

#### 1. 「現状の説明」

講義と演習の形態がある。講義は10数名から80名程度までの学生数があり、それぞれの授業規模と教育目標に応じて適切な授業形態を採っている。演習は10名前後の、演習にふさわしい適切な人数で行われている。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

特段の問題はないと考える。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

さらに有効な教育のあり方を考えていきたい。

### (B群 24) マルチメディアを活用した教育の導入状況とその運用の適切性

#### 1. 「現状の説明」

テレビやビデオ、DVDを利用した授業も増えているが、本格的にマルチメディアを活用した授業を行う設備や環境が整っていないため、さほど進展していない。ただし、レポートを電子メールで提出するなどの条件は整いつつある。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

授業科目の内容や個々の教員によって、マルチメディアへの対応には差がある。



3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

授業内容によっては、特にマルチメディアへ対応する必要の無い科目もあるが、個々の教員の問題は、各人の努力に期待したい。

(B群 25) 「遠隔授業」による授業科目を単位認定している大学・学部等における、そうした制度措置の運用の適切性

1. 「現状の説明」

本学科では、「遠隔授業」は行っていない。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

## 文学部外国語学科中国語専攻

### I 大学・学部における主要点検・評価項目

#### 3 学士課程の教育内容・方法等

##### 評価目標

学芸の教授および研究の充実により、学生の知的、道徳的能力を一段と向上させ、英知と創造性に富んだ総合的人間形成をめざす。とりわけ、現代中国語の高度な運用能力、国際的な視野、堅実な実務能力を身につけることをめざす。

##### 具体的方法

体系的教育課程の充実を図る。学部学科間の垣根を低くして、時代の要請に対応する教育の総合性、機動性をもたせる。

#### (1) 教育課程等

(学部・学科等の教育課程)

(A群1) 学部・学科等の教育課程と各学部・学科等の理念・目的並びに学校教育法第52条、大学設置基準第19条との関連

##### 1. 「現状の説明」

専攻は、1年次の専門科目に、必修科目として中国語概論および会話、文法、講読等の語学科目、選択科目として中国の歴史や日中関係史等を配置している。2年次に1ランク上の語学科目を必修科目に配置し、選択科目に中国の政治、経済、社会、思想、教育などを設けている。

3, 4年次には語学科目としてさらに専門度の高い時事中国語、ビジネス中国語、通訳演習等を配置し、そのうえで演習、原書講読、特殊講義等を設けている。これによって幅広い知識とともに、専門の学芸を教授研究することをはかっている。

##### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

本専攻の理念・目的に沿った教育課程が設置されていると思われる。ただし、専門科目のなかの必修科目である演習の人数が少なく、共同研究やグループ発表がしにくい。その観点から言えば、定員を拡大することが望ましい。近年、他学科の学生に対し、ゼミの履修を認めたが、他学科生に対する説明がなく、効果は十分に現われていない。また、演習で原書を利用した発表や論文作成が、まだ十分になされていないことも問題点の一つに挙げられる。

##### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

新カリキュラム（専門科目）では、時代のニーズを考え、「マルチメディア中国語」「インターネット中国語」「中国語コミュニケーション」（いずれも選択科目）を新しく設置し、2005年度から開設予定になっている。

また、2年次までの語学教育を生かして、3、4年次の演習では、原書を十分に利用した演習方法を検討していきたい。

## （A群2）学部・学科等の理念・目的や教育目標との対応関係における、学士課程としてのカリキュラムの体系性

### 1. 「現状の説明」

国際化時代にふさわしく、生きた語学力を養い、実践的で高度なコミュニケーション能力と豊かな教養を備えた人材を養成する目的のもとに、言語文化教育と地域研究を結合した特色ある教育という観点から体系的にカリキュラムを編成してきた。

分野別に見れば、専門科目は、言語系科目 20 科目、人文系科目 7 科目、社会系科目 5 科目、学際系科目 1 科目から構成されており、さらに複数の教員が担当する演習。特殊講義、卒業論文も別途に設けている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

学士課程におけるカリキュラムの構成は、おおむね本専攻の理念および教育目標を達成するに足る体系性を持っている。今後、さらにこの体系性を検討し、より充実した、効果のあがるものにしていかなければならない。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

本学のワールド・ランゲージ・センター（WLC）と提携し、WLC の会話科目を積極的に利用できるように検討したい。また、学生にインセンティブを与え、授業の効果を測る目的のために、種々の検定試験を受験させるように指導していきたい。

## （A群3）教育課程における基礎教育、倫理性を培う教育の位置づけ

### 1. 「現状の説明」

専門科目内の基礎教育科目は、中国語概論、初級と中級の会話、文法、講読および作文基礎である。これらの科目は必修科目として1、2年次に配当されている。広義の基礎教育としては、中国事情、日中関係史、中国の歴史があげられる。また、中国研究入門も新設した。こうした基礎的学問と教養の習得に加え、少人数のゼミナールにおける不断の対話を通して、倫理性が培われている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

おおむね教育課程における基礎教育、倫理性を培う教育は効果をあげていると言える。さらに一段と教育効果を高める工夫が必要である。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

本専攻内に中国関連科目は十分に配置されているが、その前段階の基礎教育も必要であ

と思われるので、共通科目の中にある共通基礎演習科目等を積極的に履修するように指導していきたい。それによって、学生の基礎力と倫理性を培う教育がより充実できると考えている。

## (B群1)「専攻に係る専門の学芸」を教授するための専門教育的授業科目とその学部・学科等の理念・目的、学問の体系性並びに学校教育法第52条との適合性

### 1. 「現状の説明」

中国語を通して深く広い中国理解を目指すために、また日中交流の各方面における有用な人材を養成するために、①言語系②人文系③社会系④学際系に分けて専門科目を配置している。

①言語系科目の内、「中国語概論」、「中国語文法（初級、中級）」、「中国語会話（初級、中級）」、「中国語講読（初級、中級）」、「中国語作文基礎」は必修科目とし、より専門的な科目を学ぶ基礎と位置づけている。

②人文系③社会系④学際系の専門科目は、より深い専門知識の教授を行うための選択科目であり、これらの科目は学生が自らの関心と必要に応じて選択することが可能である。またこれらの科目は、演習および卒業論文の作成を通してさらなる専門知識の深化と研究へと進むための導入としての役割を果たしている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

専門教育的授業科目は言語文化研究と地域研究の2分野からなり、基本的に中国語専攻の理念・目的に沿っていると言える。またこれらの科目は学校教育法第52条の内容に適合している。

中国語専攻の専門科目の特徴は、語学力と専門性を結合させ専門知識の教授を行う点にある。日常生活領域の範囲を超え、専門性の高い科目において語学力を活用できるよう導く必要がある。具体的には、資料読解の能力強化をはかる必要がある。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

上記問題点の改善は科目の編成に関わる問題ではなく、既設科目の教授内容の改善によって果たされると考える。すなわち「原書講読」、「特殊講義」などの専門科目において、一次資料を読む意義を強調し、資料読解力の重要性を認識させることが必要であり、演習、卒業論文作成においても、この点を十分に指導することにより改善をはかることができるであろう。

## (B群2)一般教養的授業科目の編成における「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養」するための配慮の適切性

### 1. 「現状の説明」

一般教養科目は、共通科目運営委員会で立案・編成され、人文系・芸術系・社会系等7

系統にわたる多様な共通科目が提供されている。中国語専攻の学生は、卒業要件として 30 単位（言語系 8 単位を含む）以上の共通科目を履修することが義務づけられている。また、「自由選択科目」として 20 単位以上を履修する必要があるが、これにも共通科目からの選択が可能である。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

科目の多様性および単位数から判断し、幅広い教養と豊かな人間性を培うための配慮はなされていると言える。ただし、履修に関してよりよい指導のあり方を考える必要がある。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

共通科目における選択必修科目の配分はおおむね適当であると思われるが、昨今の学生の国語力や思考力の問題、並びに問題関心に対する興味を引き出すためにも、共通科目における演習科目を履修するよう検討する必要があると思われる。

### （B 群 3）外国語科目の編成における学部・学科等の理念・目的の実現への配慮と「国際化等の進展に適切に対応するため、外国語能力の育成」のための措置の適切性

#### 1. 「現状の説明」

中国語専攻では、日中交流の各分野で活躍する人材を養成する基礎として中国語の習得を重視している。専攻の言語系科目の中国語概論、中国語文法（初級、中級）、中国語会話（初級、中級）、中国語講読（初級、中級）、中国語作文基礎を必修科目とし、1, 2 年次において集中的に学ぶようカリキュラムを編成している。また、共通科目における言語系科目の中国語（初級、中級）を必修としている。さらに共通科目の言語系から選択必修として、英語など他言語を学ぶように定めている。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

専攻の目的実現への配慮は十分なされている。英語などの学習を選択必修とすることで国際化への対応も基本的に果たされている。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

当面、現状でよいと思われる。

### （B 群 4）教育課程の開設授業科目、卒業所要総単位に占める専門教育的授業科目・一般教養的授業科目・外国語科目等の量的配分とその適切性、妥当性

#### 1. 「現状の説明」

本専攻開設授業科目数は 71 で、130 単位である。その内必修科目は 20 で 32 単位、選択科目は 51 で 98 単位である。卒業単位は 124 単位で、その内専門科目は 76 単位（必修科目 32 単位、選択科目 44 単位）、教養科目は 20 単位（選択必修科目）、外国語科目は 8 単位（必修科目 4 単位、選択必修科目 4 単位）で、その他自由選択として、専門科目、教

養科目、他学部専門科目、特設課程科目から 20 単位履修できていることになっている。

なお教養科目の 20 単位の内容は、大学科目、学術基礎、芸術・文学、健康・体育、共通基礎演習から 8 単位、人間・歴史・思想、文化・社会・生活、環境・生命・自然、平和・人権・世界、共通総合演習から 12 単位履修するよう指定されている。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

卒業所要総単位に占める専門科目、教養科目、外国語科目等の量的配分はほぼ適正で妥当性があると思われる。専門科目の選択科目は 44 単位であるが、これは本専攻開設授業科目の選択科目は 98 単位であるので、選択の自由がかなり配慮されている。更に自由選択として、専門科目、教養科目、他学部専門科目、特設課程科目からも 20 単位履修できるので、選択の余地はかなり広い。

選択の自由度が高いということは、反面しっかりした履修のデザインがなされていないと混乱する恐れが生ずる。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

履修ガイダンスの充実、『履修要項』の熟読徹底および、クラス制度やゼミ制度の中での個別の履修相談を通しより適切に指導する必要がある。

# (B群5) 基礎教育と教養教育の実施・運営のための責任体制の確立とその実践

## 1. 「現状の説明」

本専攻では、中国語の基礎教育と、それを応用・発展させる為の教養教育を実施・運営している。1年次2年次で必修科目として中国語の基礎教育を実施し、それと並行して、中国語学習を支え、更に応用・発展させる為の人文系や社会系や言語系の科目を提供している。なお運営における責任体制は明確にしていない。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

1年次2年次で中国語の基礎教育を完成させるという明確なカリキュラム編成なので、学生にとっては明確な学習態度で望むことができる長所がある。中国語学習を支え、更に応用・発展させる為の人文系や社会系や言語系の科目の分量配分は、ほぼ適切であると思われる。運営面においては、ゆるやかな責任体制を確立し、学生の需要等に配慮する必要がある。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

人文系や社会系や言語系の科目の分量配分や内容構成を検討しながら、適切な責任体制を確立するよう努力する。

# (カリキュラムにおける高・大の接続)

# (A群4) 学生が後期中等教育から高等教育へ円滑に移行するために必要な導入教育の実施状況

### 1. 「現状の説明」

「中国研究入門」という科目を1年次の必修科目をして開設し、導入教育を実施している。中国研究を進めるという前提で、資料の検索の仕方、資料の整理の仕方、整理したものものの発表の仕方、レポートの作成の仕方等を講義している。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

導入してまだ2年目なので、継続しながらその効果を点検しなかなければならない。レポートの書き方等においては、多くの学生から高い評価を得ている。中国研究の具体的な対象領域を選定する際に、学生の興味や専攻全体の教育指導方針等から、更に適切になされなければならない。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

本導入教育の効果については、学生アンケートをとる際に、もう少し細部にわたり設問を設け実施し、結果を検討し、改善をはかる必要がある。

## (履修科目の区分)

### (B群7) カリキュラム編成における、必修・選択の量的配分の適切性、妥当性

#### 1. 「現状の説明」

現在の本専攻開設授業科目数は71で、130単位である。その内必修科目は20で32単位、選択科目は51で98単位である。必修科目は1年次に8科目12単位、2年次に8科目12単位配当し、3年次4年次にそれぞれ2科目4単位配当している。選択科目は1年次に6科目12単位、2年次～4年次に24科目48単位、3年次に6科目10単位、3年次～4年次に12科目22単位、4年次に3科目6単位をそれぞれ配当している。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

学年が上がるにつれて、選択科目を多く配当し、かつ履修しやすく編成されており、適切性、妥当性が高いと言っても過言ではない。ただし学生が履修をする際に、どれだけこの利点を活用しているかということになると疑問が残る。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

履修ガイダンスの充実、『履修要項』の熟読徹底および、クラス制度やゼミ制度の中での個別の履修相談を通しより適切に指導する必要がある。

## (授業形態と単位の関係)

### (A群5) 各授業科目の特徴・内容や履修形態との関係における、その各々の授業科目の単位計算方法の妥当性

#### 1. 「現状の説明」

本学の単位計算方法に従い、講義科目は半期2単位、語学科目は半期1単位を原則として与えている。しかしながら語学科目の内、講読、会話、コミュニケーション、通訳演習

を除いては、半期2単位を与えて講義科目のように取り扱っている。卒業論文は4単位を与えている。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

本専攻が開設する語学科目は、その高い専門性や少人数クラス制による充実度等から考慮すると、半期2単位を与えるに十分値すると考えてよいと思われる。従って半期2単位を与えていない語学科目に対しても、現状のままでもよいか再度検討する必要がある。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

履修者の学習意欲の向上等も考慮するならば、半期2単位を与えていない語学科目に対して、更なる内容の改善・充実をはかり、半期2単位を与えていく方向で努力したい。

### (単位互換、単位認定)

(B群8) 国内外の大学等と単位互換を行っている大学にあっては、実施している単位互換方法の適切性

#### 1. 「現状の説明」

専攻の多くの学生は、中国語専攻主催の武漢大学特別留学、交換・推薦留学制度および私費留学を積極的に利用している。武漢大学特別留学制度に参加し所定の成績を修得した学生は、一括して34単位が認められる。交換・推薦留学制度および私費留学を利用した学生は、60単位を限度として単位の認定がなされる。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

現行の単位交換制度はおおむね妥当である。しかし大学により科目名と履修時間が本学と異なる場合があるので、単位認定の申請に際し、あらかじめ教員と相談するように指導しているが、一部の学生は遵守せず、互換科目名の間違いや記載漏れ等のミスが目立っており、さらに徹底させる必要がある。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

派遣留学や私費留学の場合は、その単位認定は自己申請に基づくので、教員による適切なアドバイスを確実に行うように指導する。また教務課は、過去の単位互換の例や注意事項等をパンフレットあるいは学内ネットで掲載し、国際部主催の留学ガイダンスで資料を配って説明する必要があると思われる。

(B群9) 大学以外の教育施設等での学習や入学以前の既修得単位を単位認定している大学・学部等にあっては、実施している単位認定方法の適切性

#### 1. 「現状の説明」

既習得単位は30まで認定されている。3年次編入では、共通科目32単位、専門科目30単位の計62単位が一括認定されている。その他に検定試験(現在のところ、「中国語検定」「HSK(漢語水平考試)」のみ)の合格者に対して、6単位を上限として単位認定を



している。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

現在のところ大きな問題はない。前者については、特に留学中に「HSK」を受験する一つの大きな動機付けにもなっている。なお特別な理由もなく、講義に出ないでこの制度を利用し単位認定を考える学生がいるので、検討する余地がある。

後者については、中国語を学習してこなかった学生が、入学前の既修得単位が認定されたにもかかわらず、1・2年次の専門科目の言語系科目を履修する傾向がみられる。それらの学生にとっては、負担がかなり重いと思われる。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

履修上限制度の導入後、言語関係の学習状況を中心として、教育効果を評価しながら、単位認定について再検討する必要がある。

## (B群 10) 卒業所要総単位中、自大学・学部・学科等による認定数の割合

### 1. 「現状の説明」

本専攻が実施している武漢大学での「特別留学制度」に参加し所定の条件を満たした学生は、一括して34単位認められるので、卒業所要総単位124単位中、約3割を占めることになる。本学が実施している派遣留学制度に参加した学生、および私費留学した学生は、60単位を限度として単位の認定がなされるが、現状では2単位から32単位まで様々である。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

中国語専攻という特殊性から考えると、認定数の割合はおおむね妥当であると思われる。3年次後期から留学する学生は、ほとんどの科目をすでに修得しているので、2単位か3単位で十分な場合もある。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

自大学でしか提供できない教育カリキュラム内容との関係を考慮し、さらに履修上限制度の導入を考え、将来の事態に備え検討しておくことも必要である。

## (開設授業科目における専・兼比率等)

## (B群 11) 全授業科目中、専任教員が担当する授業科目とその割合

### 1. 「現状の説明」

専攻は、10名の専任教員と1名の兼任教員から構成されている。授業科目数73に対して専任教員の担当は71であり、専任教員の担当比率は97%である。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

ほとんどの専門科目は、専任教員が担当していることにより連携しやすくなっている。意見交換もスムーズに行うことができ、会議を開いて授業科目などの検討や調整も容易に行うことができている。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

専任教員の定員枠を考えると、専任教員の退職後、当分の間徐々に兼任教員を増やし、専任教員が担当する授業科目の割合を減らしていく必要がある。

## (B群 12) 兼任教員等の教育課程への関与の状況

### 1. 「現状の説明」

1名の兼任教員は2つの専門科目を担当している。兼任教員はネイティブであり、担当する科目名は「中国語作文基礎」、「通訳演習」である。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

全体からみれば兼任教員が担当している授業科目は少ない。担当する科目数からみれば、兼任教員の教育課程への関与も多くない。しかし担当科目のなかに必修科目も入っているため、表面上より深く関与している。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

専任教員数の減少状況のみをみて、語学専門の兼任教員を適切に増やしていきたい。今後、専門科目のなかの選択科目を中心に、兼任教員が担当できるよう検討する必要がある。

## (生涯学習への対応)

## (B群 13) 生涯学習への対応とそのための措置の適切性

### 1. 「現状の説明」

これまで、社会人学生は1名いた。専攻としては、教育課程編成上において特別な配慮をしていないが、教育指導上の配慮は担当教員に任せている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

現状では特に問題は生じていない

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

今後、出願者が増えてくる可能性が大いにあるので、何らかの配慮を検討する必要があると思われる。

## (教育効果の測定)

## (B群 14) 教育上の効果を測定するための方法の適切性

### 1. 「現状の説明」

本学は、各セメスターごとの定期試験及びレポートの成績を集計した GPA 制度があり、これにより学生の成績評価の動向を知ることができる。又 1999 年度後期より、本学の全学生による授業アンケートをそれぞれのセメスター末に行っている。調査項目については全学共通のものである。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

GPA については、本専攻内で成績評価に関して正式に討議されたことがなく、どの程度

客観的なものと成り得ているのかということにおいて問題点はあると言えよう。授業アンケートの長所としては無記名であるため、学生の率直な評価を知ることができる。又授業アンケート実施率が高いことから、より客観的なものと成り得ていると自負して構わないであろう。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

今後共検討を重ねていく必要がある。

## (B群 15) 教育効果や目標達成度及びそれらの測定方法に対する教員間の合意の確立状況

### 1. 「現状の説明」

GPAの結果に基づいて、最高評価である@の割合については教員間で一定の合意が図られたことがある。授業アンケートについては、各教員個人の結果の一部が公表されている。教育効果や目標達成度及びそれらの測定方法に対する教員間の合意については確立されていない。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

GPAを基に、教員間の成績評価をより客観的なものにすべく、今後共検討を重ねていく必要がある。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

今後、授業アンケートの内容項目やその結果を受けた実験プログラムを試みることが可能であろう。その上で、教員間のよりレベルの高い合意が形成されることと考える。

## (B群 16) 教育効果を測定するシステム全体の機能的有効性を検証する仕組みの導入状況

### 1. 「現状の説明」

「教育効果を測定するシステム全体の機能的有効性を検証する仕組み」について、これを学生へのフィードバックを検証することであると理解するならば、これについて現状ではほとんどなされていないといえる。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

学生へのフィードバックを早急に実施できるようにするのが望ましいが、われわれ教員間でこのような方策を本格的に研究したことはない。したがって実質的には第一歩から始めることになる。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

学生へのフィードバックは、学生の協力や学生との相互交流がなければ有効となりえない。有効な方法を探るようさまざまな試みすることが必要であろう。また、この面における成功事例のヒアリングを行うことも検討に値する、といえよう。

## (B群 17) 卒業生の進路状況

### 1. 「現状の説明」

本専攻は1990年設立以来今年で15年を迎え、毎年30余名の卒業生を送り出している。この間、ジャーナリズム、メーカー、商社、流通産業、ITソフト産業、日中関連文化団体など中国にかかわる多くの業種や企業に人材を輩出してきている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

1994年より通算10期の卒業生を送り出しているが、本専攻独自の卒業生名簿がない。これまで、何度か卒業生に呼びかけその作成を心がけたが、未だ実現していない。最新且つ網羅的に、本専攻の卒業生を把握する資料が必要であろう。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

本専攻卒業生の社会的評価をより正確に検証するためにも、今後、「創友会（同窓会）」と連携するなどの方法を模索し、卒業生名簿などのデータベースを作る必要がある。それにより、点検・評価のための基礎データのひとつを整えることもできよう。

## (厳格な成績評価の仕組み)

## (A群 6) 履修科目登録の上限設定とその運用の適切性

### 1. 「現状の説明」

本専攻においては、早期卒業制度、成績優秀者制度を導入するため、各セメスターの履修上限単位数を20単位、履修下限単位数を16単位以上に設定している。成績優秀者になれば、上級年次の専門科目を履修することが可能になる。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

履修制限による利点は、学生が履修登録時履修科目の選択を慎重に行うようになること、選択した履修科目の勉学に集中する時間的余裕ができるようになること、などが挙げられる。科目履修については効果が現れてきているが、履修科目の勉学にその時間が向けられているのかどうかを検証することは難しい。また、履修制限の上限を再検討してほしい、との学生の声の一部がある。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

早期卒業制度と上級年次履修制度の関係から、履修制限の見直しは難しいが、将来の進捗状況を見ながら、改善していきたい。

## (A群 7) 成績評価法、成績評価基準の適切性

### 1. 「現状の説明」

成績評価は各セメスター末に行われる定期試験及びレポート等の成績、出席状況などを総合し、A・B・C評価とR・S評価で行っている。また、1999年度からGPAが導入され、成績優秀者や表彰などの評価基準として活用している。成績評価基準および留学に伴う単位互換の成績評価基準も、大学全体の基準に準拠している。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

成績評価の方法や成績評価基準を事前に明示している点は、学生の学習意欲を喚起する上で効果的である。しかし、成績評価方法は各教員の専権事項であるため、成績にばらつきがある。総合評価とはいうものの、点数配分が明示されていないこともあり、あいまいな点があることは否めない。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

各科目の成績評価については総合的に行われているが、シラバスに記載されている「評価・試験方法」をより明確にする必要がある。それにより、学生の学習意欲の向上につながることを期待できるのではないかと考える。

### (厳格な成績評価の仕組み)

#### (B群18) 厳格な成績評価を行う仕組みの導入状況

##### 1. 「現状の説明」

全学的に三分の二の出席が定期試験の受験要件となっており、また現行の試験点数と評価の関係は、90点以上が◎、80点～89点がA、70点～79点がB、60点～69点がC、59点以下がD（不合格）となる。大学の成績評価基準に準拠して成績評価を行っている。

##### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

成績評価法と成績評価基準は履修要項・シラバスで明示している。「@とAを合わせて20%以内とすることが望ましい」という点についても、おおむね準拠していると言える。ただし、前回の点検時でも指摘されたが、評価時に成績評価を甘くする、授業内容のレベルを易しくするなど、学生の安易な期待に応える状況もやや見受けられる。

##### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

「最終的にどのような能力と知識をどの程度身に付けられたのか」という観点から成績を評価することがさらに必要になっていると思われる。このためには、従来の筆記試験に加え、評価のための多様な方法を開発し組み合わせることが望ましい。

#### (B群19) 各年次および卒業時の学生の質を検証・確保するための方途の適切性

##### 1. 「現状の説明」

中国語専攻ではほぼ全員が卒業論文を書いており、各年次に関門制は採用されていない。また、卒業論文は履修上限と下限の制限を設けて、質の確保を期している。

##### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

学習した中国語が、演習や卒業論文作成にそれ程生かされていないように見受けられる。しかし、本年度から卒業論文の発表大会を開催することになり、しかも口頭試問がするようになった。これからも卒業論文に対する取り組みに積極的な効果が現われることが期待される。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

2001年度より質の確保を期すため、履修上限と下限の制限を設けたので、当面、その推移を見守っていききたい。

## (履修指導)

### (A群8) 学生に対する履修指導の適切性

#### 1. 「現状の説明」

履修ガイドラインを作成し、『履修要項』に掲載し学生へ指導している。さらに、セメスターごとの専攻ガイダンス(1・2年生対象)、オリエンテーション終了後の希望者への個別指導(1・2年次の担任とコーディネーターが担当)も実施している。創価大学では履修情報の電子化(Webベースによる情報提供)が進んでいる。これは基本的には望ましいことである。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

すべての学生がまだWebベースによる情報の収集に習熟しているとは言いがたい。さらにきめの細かい対応が必要であろう。専攻は、履修ガイドラインを作成し、毎年度の『履修要項』に掲載し指導している。またセメスターごとに1・2年生を対象に専攻ガイダンスを行い、学生の質問等も受付けている。オリエンテーション終了後、1・2年次の担任とコーディネーターは学生に個別に随時指導している。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

ガイダンスのやり方や内容をさらに工夫する必要がある。履修以外の説明は、別途に設けて行うよう改善していききたい。

### (B群20) オフィスアワーの制度化の状況

#### 1. 「現状の説明」

オフィスアワー実施一覧によると、2004年度は7名の教員がオフィスアワーを実施している。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

『履修要項』のオフィスアワー実施一覧に掲載されていない教員についても、進んで学生の質問を受付け、研究室も開放している。オフィスアワーの意味を知らない学生も依然として多数いる。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

基本的には、教員との学習相談＝オフィスアワーにおける研究室来訪が必須になるような体制を専攻で作ることが必要である。教員全員がオフィスアワー実施一覧に掲載することが望ましい。今後さらに学生に活用をアナウンスするよう努力する。

### (B群21) 留年者に対する教育上の配慮措置の適切性

### 1. 「現状の説明」

本専攻の留年者は、ほとんど留学によるものである。ただし、専攻としては特に配慮措置を設けていない。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

プライバシーの問題もあり、対処しにくいところが大いにあるが、留年しても必修科目の履修が保証されているし、同じ曜日・時間に科目が重なっても個別に対応してきたので、特に問題はない。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

一般に留年者にたいしての何らかの配慮措置を考える時期が来ていると考えられる。

## (教育改善への組織的な取り組み)

### (A群 9) 学生の学習の活性化と教員の教育指導方法の改善を促進するための措置と有効性

#### 1. 「現状の説明」

教員の指導方法の改善については、授業アンケート調査（無記名方式）を各 Semester 末に実施している。また、文学部では、Semester ごとに学生の代表とコーディネーターによる懇談会を設け、学生の要望を吸い上げている。その他、オフィスアワーや教員との個別の懇談を通して、学生の学習の活性化を図っている。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

授業アンケート調査の長所は、学生の授業に対する要望をある程度吸い上げることができる点であろう。問題点は、学生の学習意欲が低調な場合、教員の学生に対する到達度の要求と噛み合わない時がある。授業アンケート調査の実施によって、学生が多少なりとも授業参加について考えるようになった。

現在の授業アンケートは記述式に導入しているであるが、現状では、必ずしもすべての学生が記述欄に多くの意見を記入するわけではない。学生の意見を反映する機会として、たんに学期終了時のアンケートだけではなく、フィードバックをきめ細かくとってゆくことが必要であろう。また教員の側も、その教育指導方法の改善にさらに自覚的になる必要がある。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

科目の性質にもよるが、教員は授業の中で学生に発表や意見を求める機会を増やすことを検討する必要がある。その他、次回までの学習の指示、前回の授業の確認作業など、教員の教育指導方法の改善を通して、学生の学習の活性化が図られるので、鋭意努力していきたい。この問題は、教員の個人的な努力に任せられるだけでなく、全学的な体制づくりが必要であろう。

## (A群 10) シラバスの作成と活用状況

### 1. 「現状の説明」

シラバス作成ソフトを利用して、シラバスを作成し学生に公開している。教員は学習目標、授業計画、授業方法を明記し、毎回の授業内容を提示するとともに、到達目標、評価基準を明示している。シラバスの内容は毎年更新している。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

シラバス作成ソフトの活用で、作成時間がフレキシブルになったため、作成に余裕が持てるようになった。

ソフトへのアクセスに問題が生じることがあった。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

シラバス作成ソフト利用法の周知徹底と、説明会の回数を増やす等の工夫をする必要がある。よりわかりやすいシラバス作成のためにパソコン上で参照できる簡易マニュアル等を作成し配布するよう要望する。

## (A群 11) 学生による授業評価の活用方法

### 1. 「現状の説明」

年2回、全学的に授業評価アンケートを実施し、その結果を公表している。結果はその都度教員にも提示され、授業計画、シラバス作成に生かされている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

授業アンケートの実施が恒例化しデータが蓄積されることにより、より実効性のたかいものとなっている。従来はアンケート実施率は前期の方が高く、評価は実施率の低い後期の方が高くなっている。実施時期が学期末の授業時におこなわれるため、授業計画に影響する場合があります。実施方法についてはさらに工夫する余地があると思われる。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

専攻の性格からか、学生の語学学習に対する意欲の高さは調査結果から明らかである。今後は学生の学習意欲を維持させつつ、講義科目に対する意識付けも高めていけるようなアンケート内容を検討する必要がある。

## (B群 22) F D活動に対する組織的取り組み状況の適切性

### 1. 現状の説明

大学の所属機関として「教育学習活動支援センター」が開設され、当機関による教育活動支援の一貫としてF D活動に関する各種講演会、研究会等が開催されている。本専攻の教員もこれらの活動に参加し、各授業への導入を進めている。

2004年2月には第1回F Dフォーラムが開催され、各セッションに参加してF D活動に対する理解を深め、意見交換をおこなった。2005年2月には第2回F Dフォーラムが開催され、専攻教員の多くも参加予定である。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」



センターの開設により、多くの教員がFD活動についての理解を深め、授業への導入に取り組んでいる。

研究会等の開催時間と授業、会議が重なる場合が多いため参加できない場合がある。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

各種活動の実施回数を増やす。活動に参加できなかった教員にも、実施状況や内容紹介をさらに周知徹底し、よりいっそうの効果を計る。

教育支援の方法やツールをホームページ上などに紹介し、積極的な活用を促す。

## (授業形態と授業方法の関係)

### (B群 23) 授業形態と授業方法の適切性、妥当性とその教育指導上の有効性

#### 1. 「現状の説明」

CALL教室、AV教室を使用したり、ビデオ、テープレコーダー、CD/MDプレーヤー、DVDプレーヤー、プロジェクター、スライドを使用する授業も多い。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

各教室の無線LAN設備の拡充が望まれる。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

C棟の設備状況は改善されているが、より一層の充実を望みたい。

### (B群 24) マルチメディアを活用した教育の導入状況とその運用の適切性

#### 1. 「現状の説明」

現在各教室棟にマルチメディアを使用できる教室が設置され、授業で利用されている。

中国語専攻としては3年次選択科目として、「マルチメディア中国語」「インターネット中国語」を設置し、2005年度より開講する。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

マルチメディア教育に相応する設備の拡充が望まれる。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

マルチメディアを活用した授業を増やしていく。そのためのスキルやツールを組織的に提供する環境を整える。特にオリジナルの教材作成のための機材・設備の設置や、利用などに際しての事務サイドのサポートのさらなる拡充が望まれる。

### (B群 25) 「遠隔授業」による授業科目を単位認定している大学・学部等における、そうした制度措置の運用の適切性

#### 1. 「現状の説明」

現在は「遠隔授業」を実施していない。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

とくになし。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

今後外国語科目で「遠隔授業」が実施される状況になれば、中国語でも取り入れたい。

## 文学部外国語学科ロシア語専攻

### I 大学・学部における主要点検・評価項目

#### 3 学士課程の教育内容・方法等

##### 評価目標

学生の総合的人間形成を図るとともに、日露の経済交流、文化交流の分野で活躍しうる高度の語学力と幅広い視野、すぐれた実務能力をもつ人材の育成をめざす。

##### 具体的方法

各科目担当者間の連携をより密にして、効果的な教育を図る。

#### (1) 教育課程等

(学部・学科等の教育課程)

(A群1) 学部・学科等の教育課程と各学部・学科等の理念・目的並びに学校教育法第52条、大学設置基準第19条との関連

##### 1. 「現状の説明」

本専攻は、1年次に必修科目としてのロシア語の基礎文法、会話、音声学、ドリルを主な内容とする「総合ロシア語」等の語学科目と、選択必修科目として「ロシア事情」「ロシア文学入門」「東欧事情」等の地域研究科目を置いている。2年次には必修科目として一段高度なロシア語文法、会話、購読、作文等の語学科目と、選択必修科目としてロシアの歴史・地理・「中央ユーラシア史」、「国際関係論」等の地域研究科目と、選択科目としてポーランド語、チェコ語、ブルガリア語、セルビア・クロアチア語等の語学科目および外務公務員志望者のための科目を設置している。3, 4年次には必修科目としてさらに高度な文法、作文の語学科目および演習と、選択必修科目として「時事ロシア語」「ロシア文学購読」「商用ロシア語」等の高度かつ専門性の高い語学科目と、選択科目として「ロシア語翻訳論」「ロシア語通訳演習」などの数多くの科目を置いている。

ロシアおよび中央アジアを含む地域の言語・文化・社会に関する深い専門知識と、高度な応用能力を培い、本専攻の理念目的にかなう人材養成のカリキュラムとなっている。

##### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

本専攻の理念・目的に沿った課程が設置されていると思われる。強いていうならば、一つはロシアの文化に関する科目が文学に偏りすぎ、美術・音楽・演劇等、広くロシア文化を学ぶことができていないうらみがある。

##### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

2007年度の学部改組・再編に向け、カリキュラムをより充実させるべく、配当年次や必修・選択の変更、新規科目の開設などを行い、より一層実践的語学力を身につけさせるようにしたい。

## (A群2) 学部・学科等の理念・目的や教育目標との対応関係における、学士課程としてのカリキュラムの体系性

### 1. 「現状の説明」

専門科目に関しては、ロシア(および同国と文化的・歴史的に密接な関係を有するスラブ語諸国ならびに中央アジアを含む旧ソ連諸国)の社会・文化に対する深い理解と実践的かつ高度なコミュニケーション能力を獲得することによって、様々なレベルでの交流拡大、相互理解に進化促進に貢献しうる人材を養成するという、専攻の教育目的を達成しうるように編成している。すなわち言語文化教育と地域研究を結合した教育をカリキュラムの中心に据え、さらに周辺の科目や国際公務員等をめざす学生のためのカリキュラムを配置している。

分野別には、専門科目は、言語系科目 26 科目、人文系科目 7 科目、社会系科目 8 科目、学際系科目 3 科目から構成しており、その他に演習・卒論をもうけている。

一般教育科目、外国語科目、保健体育科目は、共通科目として(ロシア語以外の外国語 4 単位を含め)20 単位以上履修すべきとし、特に科目指定はしていない。ただし、別途履修のガイドラインを定め、希望進路別に履修するのが望ましい科目を提示し、学士課程としての体系性を考慮しつつ、専門性に偏しない幅広い教養を備えた人材の育成をはかっている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

学士課程としてのカリキュラム構成は、履修ガイドラインの設定によって、おおむね本専攻の理念・目的や教育目標と対応した体系性を備えたものと考えられる。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

共通科目群の科目選択については、一応のガイドラインを提示しているが、学生の自主性に任されている。ただし、共通科目でのロシア語以外の外国語科目では将来は英語 4 単位を指定したいと考えている。さらに学生がどの程度までガイドラインに沿った選択をしているか点検をし、適宜、指導していく必要がある。

## (A群3) 教育課程における基礎教育、倫理性を培う教育の位置づけ

### 1. 「現状の説明」

1, 2年次配当の必修科目としての文法、会話、作文、講読等の語学科目は、本専攻のすべての学生が身につけるべき基礎的科目として位置づけられている。また、選択必修科目として置かれている語学系、人文系、学際系科目は、一般的・基礎的知識を養成し、3, 4年次での的確な科目選択を行うことをめざした概念的性質をもっている。

倫理性を培う教育として、独立した科目としては専門科目にはおかず、全般に少人数教育を通してそれを行うようにしている。独立した科目としては、共通科目の中から学生が自主性に任せて履修しているというのが現状である。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

専門科目内の基礎教育科目も位置づけはほぼ的確であると思われる。ただし、科目群の構成、個々の科目の内容および形態、科目群どうしの連携、3, 4年次の選択科目と内容面での整合性、レベル的な連続性については、まだ改善の余地があり、教員の定数の制約もあり、現状に甘んじている。また日露友好・親善に貢献する人材育成を掲げる本専攻として、独自の倫理性を培う特別の科目は置いていないが、各科目の担当教員がその点を十分配慮するようにしていきたい。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

基礎教育科目については、できるかぎり理想に近づけていく。倫理性を培うべき専攻独自の科目設置についても、新カリキュラム作成の段階で考慮していきたい。

## (B群1) 「専攻に係る専門の学芸」を教授するための専門教育的授業科目とその学部・学科等の理念・目的、学問の体系性並びに学校教育法第52条との適合性

### 1. 「現状の説明」

専門科目のうち狭義の専門教育科目は、基本的に3, 4年次に配当されている。日露友好・親善に貢献すべく、当該地域の人々との接触・交流が期待される様々な社会領域で活躍しうる人材を育成するとの専攻の目的のもと、社会・文化に関するより深い知識を養う科目として、言語系、人文系、社会系の講義科目を設置し、とくに実践的かつ高度なコミュニケーション能力の習得を必要とする通訳志望者のための演習科目を選択科目として設置している。また、より専門性とレベルを高めるための語学科目を選択必修科目として開設している。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

専攻の理念・目的に関しては、おおむね適合した構成だと考える。学問的体系の観点からは、ロシアの芸術、日露関係史等の科目が増設されることが望ましいと考える。「学校教育法」第52条との適合性は、おおむね保たれていると考える。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

ロシアの芸術、日露関係史等の科目の設置のすみやかな実現に向けていきたい。

## (B群2) 一般教養的授業科目の編成における「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養」するための配慮の適切性

### 1. 「現状の説明」

一般教養科目は、共通科目として立案、編成され、人文・芸術・社会系等の7系統たる

多様な科目群が提供されている。本専攻の学生は、卒業要件として 20 単位(うちロシア語以外の任意の外国語 4 単位以上)以上の共通科目を履修することを義務づけている。また、自由選択科目として 24 単位以上を履修する必要があるが、これにも共通科目からの選択が可能である。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

科目の多様性および単位数から判断し、幅広い教養と豊かな人間性を培うための配慮は適切であると考ええる。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

社会、文化に関する深い知識を培う点に関して、専門の概論科目では必ずしもカバーし切れておらず、不足分は共通科目に委ねている。学生が習得すべき基礎的知識は多様であり、今のところ共通科目の選択履修に専攻として一律の制限を設ける考えはない。

### (B 群 3) 外国語科目の編成における学部・学科等の理念・目的の実現への配慮と「国際化等の進展に適切に対応するため、外国語能力の育成」のための措置の適切性

#### 1. 「現状の説明」

本専攻は「日露友好・親善への貢献」を目的とし、ロシアおよび同国と文化的・歴史的に密接な関係を持つスラブ語圏諸国の言語の、実践的かつ高度なコミュニケーション能力を習得することを教育の重要な柱に据えている。ロシア語以外のスラブ語も専門科目内の選択科目として設置している。その基礎となるロシア語についてまず徹底した実践的な教育を行うこととし、専門科目として文法、講読、作文、会話のすべての領域にわたる高度な内容と体系性を備えた授業科目を開設している。スラブ語系言語以外の外国語について、共通科目から任意の外国語を 4 単位以上選択履修することを卒業要件としている。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

ロシア語については教育目的実現への配慮は十分になされている。共通科目の外国語については、これまで英語の履修を義務づけてこなかったが、この点については検討すべきと考える。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

共通科目群のうちの選択必修外国語科目 4 単位については英語を指定したいと考えている。

### (B 群 4) 教育課程の開設授業科目、卒業所要総単位に占める専門教育的授業科目・一般教養的授業科目・外国語科目等の量的配分とその適切性、妥当性

#### 1. 「現状の説明」

卒業のための所要単位は 124 単位であり、内訳は専門科目が 80 単位、共通科目が 16 単

位(うち外国語4単位)、その他(自由選択)24単位となっている。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

一般教養的授業科目は、自由選択分とあわせれば40単位以上履修でき、とくに少ないとはいえない。共通科目言語系の4単位も、大半の専門科目が外国語であることからいえば、必ずしも少ないとはいえない。さらに一般教養的授業科目の16単位は、共通科目言語系からも選択することができる。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

当面、現状でよいと考える。

## (B群5) 基礎教育と教養教育の実施・運営のための責任体制の確立とその実践

### 1. 「現状の説明」

本専攻に関わる基礎教育については、専攻会議において授業計画の立案を行い学部教授会の審議・承認を得た上で、専攻会議実施・運営の責任を負っている。他は、他学科と同じ。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

基礎教育については、実施・運営のための責任体制が確立されているが、実践の面ではよりいっそうの厳格さが望まれる。とくに兼任教員に委託している科目に関しては、十分に専攻の意向がくまれていないうらみがある。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

兼任教員には、当面、専攻のコーディネーターがより密に連絡をとることとしたい。

## (カリキュラムにおける高・大の接続)

## (A群4) 学生が後期中等教育から高等教育へ円滑に移行するために必要な導入教育の実施状況

### 1. 「現状の説明」

1, 2年次の学生に対しては、 Semesterごとにガイダンスを実施し、履修ガイドラインによってカリキュラムについて説明している。授業内では、語学科目はいうまでもなく、地域研究科目のような講義科目についても、教員はつねに受講者の理解度を確認しながらすすめるように配慮している。学生に対する個別指導に関しては、主にクラス担任がこれに当たり、他の教員もオフィスアワーをもうけ、指導に当たる体制が確立されている。卒外の時間を使って、学習面その他学生生活全般にわたる指導に当たっている教員も多い。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

専門への入門科目として「ロシア事情」「ロシア文学入門」等を1, 2年次に配しているが、まだ学生の多様な要望に十分応えきれていないうらみがある。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

2007年の新カリキュラムでは言語系の入門科目の導入も考えている。

#### (履修科目の区分)

(B群7) カリキュラム編成における、必修・選択の量的配分の適切性、妥当性

##### 1. 「現状の説明」

「共通科目」 (選択必修 4 単位、選択 16 単位) 小計 20 単位、「専門科目」 (必修 36 単位、選択必修 20 単位、選択 24 単位) 小計 80 単位、「自由選択科目」 24 単位。

##### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

ほぼすべての学生にとって、ロシア語が初めて学ぶ言語であること、また徹底した語学教育を行うとの観点から、語学科目、とくに基礎教育的科目としての1, 2年次配当語学科目の履修を義務づけるのはやむを得ない。他学部と比較して、必修科目の比率が高いとしてもそれ自体が不適切とは考えない。しかし、とくに2年次配当の必修科目で単位を落とす学生が増えてきており、何らかの措置を講じる必要がある。

##### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

2007年度のカリキュラム改定では、専門の語学必修科目を選択にしたり、あるいは全体的な単位設定の変更も視野に入れて検討していく予定である。

#### (授業形態と単位の関係)

(A群5) 各授業科目の特徴・内容や履修形態との関係における、その各々の授業科目の単位計算方法の妥当性

##### 1. 「現状の説明」

講義科目や演習科目では週1コマを2単位として、語学科目では週1コマを1単位として各々配分している。

##### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

授業に臨む際の準備に当てる時間は、語学科目の方が多いたというのが実態であると思われるが、教育効果面から考えて、語学科目のコマ数を減らすことは好ましくなく、現行の方法で妥当と考える。

##### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

より少ない労力・時間で、より大きな効果が得られるよう、教材や教授法を改善する努力を続けなければならない。

#### (単位互換、単位認定)

(B群8) 国内外の大学等と単位互換を行っている大学にあっては、実施している単位互換方法の適切性

##### 1. 「現状の説明」



本専攻の多くの生徒は、本専攻主催のモスクワ大学特別留学、国際課主催の派遣留学制度および私費留学制度を積極的に利用しているが、学生帰国後の各自の認定単位申請に基づき専攻会議で検討し、学部教授会の議を経て60単位を限度として単位が認定される。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

1, 2年次での留学には教育効果上疑問があり、3年次以降での留学を勧めているが、互換対象科目は専攻の多くの場合語学専門科目に限られ、3, 4年次配当の専門科目中、内容からみて単位互換が可能な語学科目は余り多くない。さらに留学先の大学でのカリキュラムが語学中心であるため、地域研究科目の単位認定が少ないのも問題である。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

将来的には留学先の大学でのカリキュラムがもっぱら語学科目とならないよう多様なカリキュラムを組んでもらうよう交渉する必要がある。

## (B群9) 大学以外の教育施設等での学習や入学以前の既修得単位を単位認定している大学・学部等にあつては、実施している単位認定方法の適切性

### 1. 「現状の説明」

既習得単位は30まで認定されている。3年次編入では、共通科目32単位、専門科目30単位の計62単位が一括認定されている。その他、検定試験（現在のところ、東京ロシア語学院主催の「ロシア語能力検定試験」のみ）の合格者に対し、6単位を上限として、共通科目のロシア語として単位認定をしている。中・高等学校においてロシア語を履修してきた入学生に対しては、単位を認めていない。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

創価女子短期大学からの編入学生に対しては、専攻の1, 2年次配当語学系専門科目を選択科目として履修することを認めているが、かなりの負担になるので1・2年の担任による個別的指導が望まれる。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

中高においてロシア語を既習し、相当程度の学力を備えた入学者には、能力判定試験等を実施して、その結果に応じて既習単位を認定するなどの方法も考える必要があろう。

## (B群10) 卒業所要総単位中、自大学・学部・学科等による認定数の割合

### 1. 「現状の説明」

認定する最大単位数は計62単位(編入学の場合、これに当たる)であり、卒業所要総単位数である124単位の半分である。留学先で取得する単位については、互換対象科目は専攻科目に限られている。認定される科目が比較的限られているため、認定は60単位まで可能ではあるが、現状は認定される単位数は15~20単位程度である。卒業必要所要単位中84単位までが専攻の専門科目であり、残り44単位をすべて共通科目および他学部科目

で取得した場合でも、6割以上は本専攻が認定することとなる。

2. 「点検・評価 長所と問題点」  
とくに問題はないと考える。
3. 「将来の改善・改革に向けた方策」  
特になし。

(開設授業科目における専・兼比率等)

(B群 11) 全授業科目中、専任教員が担当する授業科目とその割合

1. 「現状の説明」  
卒業論文を含む専攻の専門科目 99 科目中 63 科目(約 64%)は専任教員が担当している。  
専攻のカリキュラムの中核となっているロシア語及びロシア関連科目は基本的には専任教員が担当している。
2. 「点検・評価 長所と問題点」  
1 年次の会話の一部や 1 年次のドリルの授業は兼任教員が担当している。これらも専任教員が担当するのが望ましいが、専任一人あたりコマ数をこれ以上増やすことは難しく、専任教員の定数の枠がある以上、やむを得ないと考える。
3. 「将来の改善・改革に向けた方策」  
兼任教員と連絡を密にし、科目間の連続性や体系性に問題が生じないように注意していきたい。

(B群 12) 兼任教員等の教育課程への関与の状況

1. 「現状の説明」  
兼任教員は語学科目では「総合ロシア語 I～IV」「ロシア語音声学」「ロシア語作文応用」「ロシア語通訳演習」及びロシア語以外のスラブ語と「東欧事情 A, B」を担当している。
2. 「点検・評価 長所と問題点」  
今後とも、兼任教員との連絡を密にし、科目間の連続性、体系性の向上を図っていきたい。
3. 「将来の改善・改革に向けた方策」  
ロシア語の科目に関しては、教員間の密接な連携が必要とされることから、可能な限り専攻教員が担当するのが望ましいが、教員定数枠があり、かならずしも容易ではない。

(生涯学習への対応)

(B群 13) 生涯学習への対応とそのための方策の適切性

1. 「現状の説明」  
生涯学習への対応は特にしていないが、現在科目等履修生として高齢者が一名学んでいる。来学年度には社会人編入学で一名の者が 3 年次に編入学する。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

これから高齢化社会をひかえ、ロシア語専攻として何らかの対応をしたいが、現在はスタッフ的に難しい。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

各教員に対し地域での社会教育活動の参加を促していきたいが、ロシア語専攻としては特別の対応は考えていない。しかし、科目等履修生、社会人編入学生等は積極的に受け入れるようにしたい。

## (2) 教育方法等、(教育効果の測定)

### (B群 14) 教育上の効果を測定するための方法の適切性

#### 1. 「現状の説明」

本学は、毎セメスターごとの定期試験及びレポート、小テストなどの成績を基に算出した GPA があり、これによって学生の成績評価の動向を知ることができる。当面、現状で問題はないと思われる。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

GPA について、いまだ専攻内で成績評価の妥当性を議論したことはないが、一定の成績評価基準とはなっている。ただし、学生の所属学科・専攻の専門の成績評価とは必ず一致しない例もみられる。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

学生の所属学科・専攻の専門科目の GPA をだしてもよいのではないか。

### (B群 15) 教育効果や目標達成度及びそれらの測定方法に対する教員間の合意の確立状況

#### 1. 「現状の説明」

とくにまだ合意は確立していない。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

教育効果測定の基準についてまだ合意ができていない。

#### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

これは教員個人の問題でもあるが、全学的な問題でもあるので教授会、教務部等でも議論すべきであろう。

### (B群 16) 教育効果を測定するシステム全体の機能的有効性を検証する仕組みの導入状況

#### 1. 「現状の説明」

専攻で特別な仕組みは導入していない。

#### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

一部、授業アンケートに消極的な教員もいる。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

授業アンケート結果の公表はすでに決まっており、「教育効果を測定する」一つの仕組みとなった。今後は各教員の成績評価一覧の公表も視野に入れた検討が必要であろう。

## (B群 17) 卒業生の進路状況

### 1. 「現状の説明」

一般企業や流通産業に就職する者が一番多いが、次いで商社、旅行会社、通訳、銀行、公務員(教職を含む)、メーカー等となっている。大学院あるいはロシアの大学へ進む者も毎年数名いる。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

専攻で培った能力を生かした進路に進んだ者は、卒業生全体に占める割合は約2割で決して多いとはいえないが、しかし本専攻は開設してまだ15年であり、健闘していると言える。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

本専攻で培った能力を生かせる場で働ける者がもっと多くなるよう、同窓会などをつくって卒業生と現役生との交流を深めていきたい。2005年4月末に同窓会を発足させる予定である。また、各教員が、就職部と連携して、適切な進路指導を行っていきたい。

## (厳格な成績評価の仕組み)

## (A群 6) 履修科目登録の上限設定とその運用の適切性

### 1. 「現状の説明」

本専攻では履修の上限を20単位に設定している。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

現時点ではまだこの制度の有効性の評価はできない。ただ、本専攻では、3年次以降の留学を勧めているが、帰国後の単位互換対象科目がそれ程多くなく、そのため4年次での学生の負担がかなり大きいという問題がある。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

1, 2年次に可能な限り多くの単位を取得しておくよう指導していきたい。

## (A群 7) 成績評価法、成績評価基準の適切性

### 1. 「現状の説明」

成績評価は試験及びレポート等の成績、出席状況などを総合して、A・B・C評価とR・S評価で行っている。また、1999年度からGPAが導入され、成績優秀者や表彰などの評価基準として活用している。成績の評価基準は、大学の成績評価基準に準拠している。留学に伴う単位互換の成績評価基準も、創価大学の基準に準拠している。

## 2. 「点検・評価 長所と問題点」

成績評価の方法や成績評価基準を事前に明示している点は、学生の学習意欲を喚起する上で効果的である。しかし、成績評価方法は各教員の専権事項であるため、成績評価にはばらつきがある。総合評価とは言うものの、点数配分が明示されていないため、あいまいな点があることは否めない。

## 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

成績評価について、「評価・試験方法」をより明確にするとともに、成績評価基準について、全学的な合意が必要である。当面は専攻内の教員のあいだでの合意づくりを目指したい。

### (厳格な成績評価の仕組み)

#### (B群18) 厳格な成績評価を行う仕組みの導入状況

##### 1. 「現状の説明」

本学の規定では、授業時間の3分の1を越えて欠席した者は定期試験を受験できない。しかし、現状では、教員によってはこの規定が必ずしも守られていない面がある。

##### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

個別に成績評価表と成績評価基準を履修要項に明記し、学生に事前にその旨を説明している。成績評価の段階で各教員が厳格に評価することが望ましい。その他、成績評価を甘くする、授業内容のレベルを落として易しいことだけを教えるなど、学生の安易な期待に応える状況もやや見受けられる。

##### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

学生と教員の双方に、改めて成績評価上の諸規定を厳格に遵守するよう、徹底していきたい。

#### (B群19) 各年次および卒業時の学生の質を検証・確保するための方途の適切性

##### 1. 「現状の説明」

履修制限(上限、下限)制度、成績優秀者制度を除けば、専攻として特別な検証システムはもっていない。大学の検証システムに準じている。

##### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

一応、現状で適切と考える。

##### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

更によりよき方途を検討していきたい。

### (履修指導)

#### (A群8) 学生に対する履修指導の適切性

### 1. 「現状の説明」

履修ガイドラインを作成し、毎年度の『履修要項』に掲載し指導している。また Semester毎に1、2年生を対象に専攻ガイダンスを行い、学生の質問等も受け付けている。オリエンテーション終了後、1、2年次の担任とコーディネーターは学生に個別に随時指導している。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

学生のほとんどは専攻のガイダンスに出席し、説明を受けているが、必ずしも履修ガイドラインが十分理解されているとはいえない。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

専攻ガイダンスのあり方を工夫し、よりきめ細かな指導を行える体制をつくる必要がある。

## (B群20) オフィスアワーの制度化の状況

### 1. 「現状の説明」

ほぼ全員がオフィスアワーを実施している。また、その時間帯に限らず、全教員が随時学生の質問、相談に応じている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

全体として教員はよく学生の相談に応じており、好ましいと思われる。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

さらに、学生にこの制度を活用するようにアナウンスしていきたい。

## (B群21) 留年者に対する教育上の配慮措置の適切性

### 1. 「現状の説明」

一般に語学科目はSemesterごと、学年ごとに学習内容が高度になるため、各Semester、各年次配当科目の単位を落としたままで、より上級の科目を履修することは教育効果上好ましくないが、とくにこれを制限してはいない。時間割編成上、必修科目が重なった場合、下位年次配当科目から履修するよう指導している。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

必修科目が重なっている場合、学生によっては、相談にこず下位年次配当科目を履修しないまま上位年次配当科目を履修し、結果的には失敗する例がみられる。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

必修が重なっている学生の場合、学生の履修登録にあたって、下位年次配当科目から履修するよう指導を徹底したい。

## (教育改善への組織的な取り組み)

(A群9) 学生の学習の活性化と教員の教育指導方法の改善を促進するための

## 措置と有効性

### 1. 「現状の説明」

教員の指導方法の改善については、授業アンケート調査(無記名方式)を各 Semester 末に実施している。また、文学部では、Semester 毎に学生の代表とコーディネーターによる懇談会を設け、学生の要望を吸い上げている。その他、オフィスアワーや教員との個別の懇談を通して、学生の学修の活性化を図っている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

本学の理念に共鳴して入学したが、必ずしも本専攻が第一志望ではなかったという学生も一定の割合でいる。専攻の専門科目に取り組む姿勢に問題が生じるのはこれらの学生であることが多い。また、科目の内容と教員の指導方法によっては、必ずしも本学の理念とのつながりが明確には感じにくい場合があり、とくにそうした授業において問題が生じがちである。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

2007 年度の学部改組・再編で問題点はほぼ解消されるものと思われる。

## (A群 10) シラバスの作成と活用状況

### 1. 「現状の説明」

全学的に詳しいシラバスを作成することが義務づけられている。学生もシラバスをよく読み履修選択している。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

一部の教員はまだ詳しいシラバスを作成しないものもいる。また講読の授業など一回一回の授業のシラバスを作成しづらい科目もある。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

シラバスを一層詳しいものとするよう各教員に促すとともに、講読の科目などは、たとえば各回の授業で、とくにポイントとなる文法事項など、より具体的な内容にするなどの工夫が求められる。

## (A群 11) 学生による授業評価の活用方法

### 1. 「現状の説明」

学生の授業アンケート調査の結果は全学的に公開され、学生にとっては科目の履修選択の参考となっている。教員にとっても良い意味での刺激となっている。

### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

概して、授業アンケート調査の結果はよく活用されるが、一部授業アンケートを実施しない教員もいる。また評価する方の学生に授業評価を行うだけの能力に欠けると見られる者も見られる。

### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

各教員に対し必ず授業アンケートを行ない、その結果に基づき授業内容の改善を行うようコーディネーターより指示し、また学生もその結果をよくみて科目履修選択の参考とするようより徹底していきたい。アンケート調査項目のさらなる検討も必要だと思われる。

#### (B群 22) F D活動に対する組織的取り組み状況の適切性

##### 1. 現状の説明

全学で行う取り組みに参加することとしている。

##### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

各教員が自主的に参加でき、提案も要望も出せるので評価できる。ただし年輩の教員は参加に消極的になりがちな傾向があり、また出講日や業務の関係で参加できない場合が多々ある。

##### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

研修などはより頻繁に開催し、また消極的になりがちな教員にもできるだけ多くの参加を促す工夫を望みたい。

#### (授業形態と授業方法の関係)

#### (B群 23) 授業形態と授業方法の適切性、妥当性とその教育指導上の有効性

##### 1. 「現状の説明」

AV 教室を使用している科目がある。またビデオ、テープレコーダー、DVD プレーヤー、プロジェクターやスライドを使用する授業も多い。

##### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

語学の授業は 10 名程度が望ましいが、現在は会話のみ 18 名ずつ 2 グループに分けた授業が行われているだけである。30 名から 40 名もの学生に対して、講読や作文の授業は教育効果が上がりにくい。また、C 棟の教室には AV 教室がないためきわめて不便である。

##### 3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

授業コマ数をこれ以上増やすことは難しい。TA も活用しているが、カリキュラムの抜本的な改革を検討する必要があると思われる。また、早急に C 棟教室に常設のモニターやスクリーンを設置する必要がある。

#### (B群 24) マルチメディアを活用した教育の導入状況とその運用の適切性

##### 1. 「現状の説明」

インターネット使用環境は整いつつある。C 棟内に LL 教室には端末が設置され、自由に利用できるようになっている。

##### 2. 「点検・評価 長所と問題点」

若手の教員を除いては、マルチメディアの活用の動きは弱く、本格的に活用する段階には至っていない。



3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

「教育学習支援センター」とも相談し、コーディネーター等を中心に啓蒙に取り組んでいく必要がある。

(B群 25) 「遠隔授業」による授業科目を単位認定している大学・学部等における、そうした制度措置の運用の適切性

1. 「現状の説明」

「遠隔授業」は行っていない。

2. 「点検・評価 長所と問題点」

とくにない。

3. 「将来の改善・改革に向けた方策」

とくになし。